



市立小樽文学館 平成28年度 特別展

早川 三代治展

インターナショナルな知的表現者



早川三代治（明治28・1895～昭和37・1962）は、小樽で生まれ、小樽で育った経済学者・文学者です。東北帝国大学農科大学（現・北海道大学）時代に同大学講師であった有島武郎（文学者・思想家 明治11・1878～大正12・1923）と出会って心酔。以降、経済学者としての道を進みながらも、一方で、生涯にわたり、文学作品の創作に打ち込み続けました。そして従来は、早川の文学活動は、有島との師弟関係を中心とした視点から意味づけられ、作品世界も、常にその枠組みを通して解釈されてきました。

しかし、このたび、小樽商科大学収蔵の早川三代治文庫や、これまで旧宅等に保管されてきた未発表原稿を閲覧・調査した結果、旧来の早川三代治像は大幅に改められ、加筆されなければならない事が明らかとなりました。

その主な要点は、〈早川作品におけるヨーロッパ演劇からの影響〉〈インターナショナルな知的交流者〉

早川三代治〈戯曲家としての早川——島崎藤村との関わり〉〈郷土文学者としての早川〉の四点です。これらの要素はすべて、彼の後半生における創作モチーフと深く関わっています。

また今回は、早川の死によって構想のみに終わった、有島武郎の農場解放をテーマとした小説に関するメモや準備資料も公開しております。そこに示唆されている内容を、今後充分に研究・考察しない限り、なぜ早川が、晩年に改めて亡師をテーマとした小説を構想し、その人生と正面から対峙しようとしていたのかについて、意図を見誤ることになってしまうと思われれます。

このように、本展覧会においては、早川三代治の知られざる側面を広く皆様にご紹介したいと思っております。その作品世界の一端に触れていただければ幸いです。

【目次】

◇ 市立小樽文学館

◇ 小樽商科大学附属図書館

《早川三代治の生涯》

1	少年時代	1
2	有島武郎との出会い	3
3	ドイツ留学時代	6
4	ドイツ演劇からの影響 〔早川三代治文庫所蔵 演劇関連洋書について〕	9
5	島崎藤村との縁と戯曲創作	12
6	郷土作家 早川三代治	18
7	晩年の挑戦——有島を主題とした小説の構想	25

57	江頭進氏講演	57
56	亀井志乃氏講演	56
56	早川三代治展記念講演会について	56
55	〇 展示図書等一覧〔早川三代治著作・訳書〕 〈関係図書〉	55
53	〇 展示資料	53
52	〇 展示パネル一覧	52
52	小樽商科大学附属図書館「早川三代治展」について	52

《早川三代治の世界》

8	三代治と絵画	32
9	イタリア・スケッチ旅行	35
10	北欧旅行 〔北欧旅行 旅程〕	37

42	早川三代治年譜	42
49	展示資料リスト	49

(文責・亀井 志乃)

《早川三代治の生涯》

1 少年時代

早川三代治は、明治28年（1895）6月22日、小樽区（現・小樽市）の入舟町にて、父・岩三郎、母・志満（シマ）の長男として誕生した。

三代治の祖父・早川両三は、新潟上島（現・新潟市早川町）の出身。明治4年に渡道し、まだ当時は〈村並〉に扱われるようになったばかりの小さな漁場・小樽において事業を興した、文字通り草分け的人物の一人であった。両三は丸越（〇の中に越の字）を屋号とし、婿養子の岩三郎（八丈島三根村出身。のち、二代目両三を襲名）と共に醤油・亜麻油製造や米穀取引・精米業、紙茶文具商など、様々な事業を展開。やがて、同僚や、早川商店で育った人などにも暖簾分けをして、丸越商店群を形成していった。その意味で、早川商店は小樽の一大グループであったが、しかし普段の暮らしはつましく、また、両三は、暖簾分けをした家の経営方針には干渉せず、自由な発想で商売をしてもらうという方針の人物であった。なお、後年になるが、両三から三代目の三代治は商業の道を選ばなかったため、丸越商店群の紐帯は彼の代で打ち切られた。しかし、現在でも丸越の屋号は小樽の各所

に残っており、それは両三の興した早川商店の名残りである。

三代治が誕生した時、早川邸は、現在の入船十字街の一角（かつての量徳寺寺域の上手部分）にあった。庭内には入舟川の流が引き込まれ、その水を利用した精米所も建てられていた。やがて、明治35年、早川家は醤油醸造業の拡張をはかるために真栄町（龍徳寺裏手）に転居。三代治は、量徳尋常高等小学校尋常科時代の大半をそこで過ごした。その後、三代治が10歳となった明治38年、早川家は醸造業を邸宅と共に他家に譲渡し、稲穂の番外地（現・緑町）に移住。三代治はその家を終生の棲家とすることになる。

さて、明治38年、稲穂番外地に新居を建築していた早川家を眺め、記録にとどめていた人物がいた。当時、稲穂尋常高等小学校の校長で、後に39年間分もの克明な日記（小樽での生活32年間分を含む）を遺したことで知られる事となる稲垣益穂（安政5・1858〜昭和10・1935）である。「夕食後新廊道路を散歩して早川両三氏の居宅を見た。此居宅は今建築中であるが、流石区内屈指の富豪であった。其規模は頗偉大なるものである。出来上ったら壮観を呈するであらう」（『稲垣益穂日記』明治38年5月16日）。稲垣益穂は、やがて早川両三と知己

となつたらしく、同年8月には新邸内を案内してもらつてゐる。なぜ両者が親しくなつたかは詳らかではないが、早川邸の〈朝顔の鉢〉の事が出てくるので、花を通じて話題が共有出来たのかもしれない。

早朝早川両三氏宅に朝見（朝顔）を見に出かけた。五六鉢は咲いてゐたが、まだ初歩であると思つて普通のものではなかつた。併し北海道は寒気のため上品は出来ぬかもしれぬ。それから主人の案内で庭内を一覧した。池を造つて鯉が沢山飼育してある。その外目下設計中である。今一年もしたらよほどよくなるであらう。同氏は一人の孫がある。その教育方に全力を注いでやるようである。誰か監督誘導してくれる教師がいり度といつてゐた。（同前 8月3日）

この〈孫〉が三代治である。その頃、三代治は量徳尋常高等小学校尋常科に入つて4年目であつた。両三は、そのおとなしく賢い孫に対し、将来は小学校の先生にもなつて、安らかに人生を送つてくれたならばよい、と未来を思い描いていたという。そしておそらく、この8月3日に稲垣と交わされた「誰か監督誘導してくれる教師が……」という話がきっかけとなつたのであらう。それから約4週間後、両三は、三代治を稲穂尋常高等小学校

高等科に転入させることに決める。「午前には早川両三氏が来られて其孫を高等一年に入れたといふから九月一日におこしなさいと返事をした」（同前 8月30日）。

その後3年間、三代治は稲垣益穂校長のもとで高等科に学び、明治41年、13歳で芹立小樽中学校に進学した。

早川已代治（三代治）児の母堂、其児を携へて来訪。鄭重なる菓子折を贈らる。己代治児は今回中学校に入学することとなりたれば其両親及び祖父父母の喜びは如何許ならん。彼れ沈着にして而も伶俐れいれい中学校の成績は必ず佳良なるを疑はず。

（同前 明治41年4月12日 ※原文はカタカナ漢字交じり）

しっかりとした風貌の中学生として母と挨拶に訪れた三代治少年を、稲垣は頼もしく眺めていたのであらう。その日、日記に書いた〈沈着にしてしかも伶俐（落ち着いていて賢い）〉という言葉は、巧まらずして、早川三代治の本質を的確に言い当てていたと言える。



早川三代治 東北帝国大学
農科大学予科1年の頃

2 有島武郎との出会い

三代治の中学生時代、一つの内的変化が訪れた。それは、アメリカの詩人ワルト（ウォルト）・ホイットマン（1819～1892）について知ったことである。

ホイットマンは、アメリカの自由詩の基を作った革新的な詩人であるだけではなく、その詩集『草の葉』に自由・平等で人間が兄弟姉妹のような愛情で結ばれる未来社会のヴィジョンを載せて発信し、人々の心を鼓舞した人物であった。

三代治がホイットマンのことを初めて知ったのは、中学三年の時のことであった。英語教師のサミュエル・バートレットから、彼の父が実際に見た話として、大胆で勇敢なその詩人のエピソードを聞かされたのである。その話が印象に残っていた三代治は、中学四年の頃、病気で床に就いていた時に、母に勧められた評論家・高山樗牛の書の中のホイットマン論を読み、さらにその詩に対する感激を深めた。

やがて三代治は、中学五年の6月、友人に有島武郎の「ワルト・ホイットマンの一断面」（『文芸会々報』掲載）という一文を紹介される。またほぼそれと時を同じくして、文芸誌『白樺』に有島訳のホイットマンの詩「草の葉」が掲載された（7月）。それらの清新で格調高い文章に心

打たれたことが、有島という作家への傾倒を決定づけた。その人が、札幌の農学校（当時の正式名称は東北帝国大学農科大学、現在の北海道大学）の英語教師になっているということも知った。だが、自分がやがて当人に直接会い、強い感化を受けることになるのは、その頃の彼には思いも寄らないことであった。

東北帝国大学農科大学の予科に合格し、9月に新学期を迎えた三代治の前に現れて自己紹介した英語の教授は、有島武郎その人であった。それは、入試の英語の書取りの時、きびきびした言葉と動作が心に残っていた試験官だったのだ。心秘かに尊敬していた作家にじかに会えたことの驚きと喜び。それが三代治の大学時代の始まりであり、同時に、新たな人生の始まりでもあった。この時の事情は、三代治の未発表原稿「有島武郎先生のこと」（昭和10年執筆）に詳しく記されている。三代治は、札幌の北十二条にあった有島の家をたびたび訪れて文学や芸術、また海外留学時代の話を聞き、新鮮な想いを味わった。だが、感激に満ちた時代はまもなく終わりを告げた。有島が、当時胸を病んでいた妻・安子の転地療養のため、11月に帰京することになったからである。結局、三代治が学生として有島の教えに接したのは、わずか3ヶ月足らずであった。

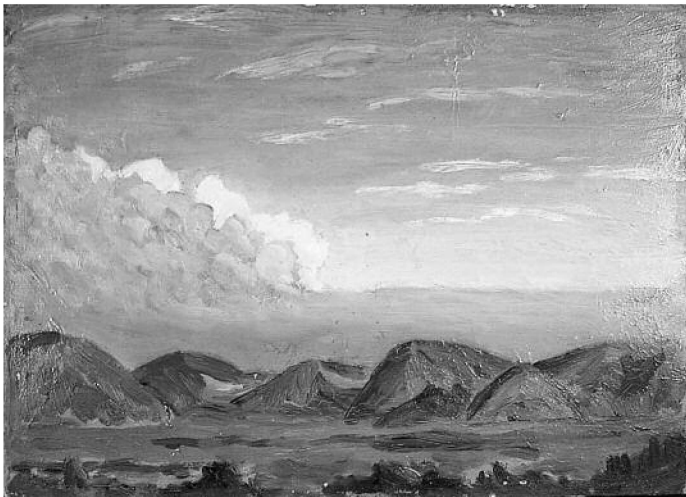
しかし、有島との心の交流はその後も続いた。大正6年に三代治が朝鮮・満州に旅行した帰途には、軽井沢の別荘に有島を訪ねて「クララの出家」を執筆中だった有島と語らい合ったりもした。また、有島が京都の同志社など日本各所で講演する際にも、極力足を運んでいた。大正5年10月に有島が農科大学に来て講演を行った際には、三代治も同人の一人だった小樽の文芸雑誌『白夜』のメンバーが、小樽での講演もと依頼したが、その時には、有島が、父親が病中にあつたために帰京を急いでいたので実現しなかった。そこで翌6年、『白夜』同人は改めて有島講演会を企画し、11月10日に実現している。場所は小樽の西洋料理店・精養軒であり、有島はそこでホイットマンの『草の葉』を朗読したが、旅先で自分の本を持っていなかったため、三代治が持参した原書を用いたという。そしてその場で次々と日本語に訳していった（早川「有島先生と小樽の『草の葉』の会」昭和28年）。

こうした有島からの影響は、必然的に、三代治の心を創作へと強く誘うものであった。だが一方で、彼には、北大で教わったすべての学問を投げ打ってまでも、「悪熱」になやまされてゐるやうな創作慾（早川「危機」昭和11年）に自己を没入させることはまだ出来なかった。結局三代治は、この時「自分の創作力を一度無為の境に放棄して

みて、それが腐り果て終ふか否かを敢て試みる」(同前) ことにした。経済学の卒業論文を出した後に、ヨーゼフ・シュンペーターの理論経済学の著作の論理的明快さに打たれた三代治は、かねてから胸に抱いていた留学への意志をさらに強くした。

単身海外へと赴く三代治にとって、旅立つ前にもっとも会いたかったのは、かつて外国の生活について生き生きと語ってくれ、自分にとって未知の世界の文化や芸術に目を開かせてくれた「有島先生」であっただろう。また有島も、三代治が留学計画を報告した際には喜んで手紙で激励し、三代治が神戸港に向かう途中で東京の有島邸を訪れた時には、スイス大使宛のビザの依頼状も書いてくれた(大正10年6月9日付)。

だが、いよいよ東京を発つ前日(6月11日)、三代治は改めて先生に旅立ちの挨拶をしようと有島邸を訪れたが、その日、有島のもとには来客がひきもきらず、書斎からは人々の談笑の音が絶え間なかった。夜11時過ぎまで待った三代治は、ついに面会をあきらめ、有島邸をあとにした(「有島武郎先生のこと」)。落胆した三代治ではあったが、しかしその時には、いざれ帰国後にはまた先生のもとに立ち寄り、様々な土産話ができる日が来るものと信じて疑わなかったのである。



有島武郎 軽井沢の朝雲 大正6年
大正7年、三代治が有島から贈られた絵

3 ドイツ留学時代

早川三代治の留学時代は、決して、条件的には、落ちついて学問に没頭するのに適した時期とは言えなかつた。むしろ、常に逆風が吹き、心乱れることも少なくない時期であつたと言える。

彼が留学先をドイツに決めたのは、その頃はドイツにおいて経済学研究が盛んだったからである。また、北大学生時代の三代治にたびたび親切なアドバイスをくれた小樽高商教授の大西猪之介が、ボン大学のハインリッヒ・デーツェル教授に留学中に教えを受けた事を聞いていたことも、理由の一つであつただろうと思われる。ちなみに、三代治は大西猪之介と、そして北大での直接の指導教官・高岡熊雄教授の二人から、デーツェル教授への紹介状を書いてもらつている。

だが、彼がその地を訪れた1921年(大正10)、ドイツは第一次世界大戦後の経済不況に苦しんでいた。戦勝国から要求された多額の賠償金はドイツ国民の生活を圧迫。三代治の下宿先、ゲハイムラート・フーバーマン氏(ゲハイムラートは「枢密顧問官」を示す称号)の家では、30歳を越した娘が長い戦争中の栄養不足から健康をそこねて青白くやせ細り、息子は、戦争で負傷した右手の人

さし指が曲がつて動かなくなつていた。また、もう一人の下宿人であるギムナジウムの教師も、夜毎、従軍時の悪夢にうなされては大声で叫ぶのであつた。三代治は、この下宿の人々と心を通わせていたが、それだけに、〈戦争〉で彼らが傷ついたさまを目の当たりにするのは心痛むことであつた。なお、1922年の2月、フーバーマン氏の娘はふとした風邪がもとで短い生涯を閉じた。三代治はその死を悼み、帰国後、短編小説「雪鐘草」(初出・『新樹』第7号 大正15年1月)と戯曲「ボンの復活祭」(初出・『三田文学』昭和8年6月)でその女性を描いている。

その後も波乱は続いた。1922年3月には、実家からの手紙で、まだ33歳と若かつた大西猪之介が腸チフスで急逝したとの連絡に衝撃を受けた。奇しくもその死は、下宿の娘が亡くなったわずか3日後のことであつた。彼は手紙を受け取つた日のことを書いた「ボンにて」という一文を、大正14年4月、『北方日本』の〈大西教授の思出〉特輯号に寄せている。

またこの年、ドイツ国銀行は、安くなる一方のマルク相場を、外国通貨を売却して何とか維持しようとしたが失敗。10月には戦前の400分の1に下落した。しかも、翌1923年の1月11日には、フランスとベルギーの連合軍がドイツの重要な工業地域であるルール地方に侵入

し、ドイツが賠償金を払えないでいることを理由に差し押さえるにその地を占領してしまつたため、重要な産業地帯を失つたドイツはさらに苦境に陥つた。同月末においては1ドルに対し4万9千マルク、7月には110万マルク、そして11月20日以降は、ついに公式レート1ドル＝4兆2千億マルクという未曾有の大暴落にまで達した。それでも、三代治ら外国人は、留学・滞在費用をポンドなど他の国の通貨で組んでおくことが可能だったので、貨幣価値の目減りの直撃は避けられたが、マルク貨で生きていくしかないドイツ国民の社会的混乱は悲惨であつた。この年の3月、ボン大学からベルリン大学に移つてシューマツハ教授の指導を受けることにした三代治は、ハイパーインフレの嵐を、首都ベルリンで間のあたりにすることとなる。

その彼をさらに襲つたのが、同年7～8月頃の「有島武郎の心中縊死事件の報」と、9月の関東大震災のニュースである。

有島の遺体発見（7月7日）について三代治が知つたのは、実は、日本での報道とそれほど大きな日数の差はなかつたと思われる。同じ頃にドイツにいた小宮豊隆（独文学者 夏目漱石の門下生）の日記には、7月27日に、知人の所でその報を電報通信で読んだという記述が見ら

れる。なお、三代治の友人たちの書簡による知らせも、8月以降に送られてきた。

しかし、三代治は、その事を知つた日のことについては、生涯、ついに一度も、自身の文章において語らなかつた。何月何日に初めて知つたのかさえ、明らかにしていない。彼が有島に言及した回想記には、「出家」（昭和4年7月『北大文藝』）、「島崎藤村と有島武郎」（昭和22年1月1日『北海日日新聞』）、「有島先生と小樽の『草の葉』の会」（昭和28年10月17日『北海タイムス』）、「実質的な絶筆である『有島先生』（昭和37年10月 講談社版『有島武郎集』月報25）、「それに未発表原稿『有島武郎先生のこと』（昭和10年）等があるが、そのいずれにおいても、有島の死を知つた瞬間にどんな心情になつたのかについては一言も触れていないのである。下宿の娘や、大西猪之介の死の報に臨んだ時とは全く対照的である。それほどまでに、三代治にとつて、有島武郎が世を去つた時の心の痛みは、表現として対象化することもできないほどのものであつたと思われる。

わたくしの宿の人たちは、女中のマリアをのぞいて、みな一日中、家にひきこもっていた。しかも、みな、無愛想ではないが、ひどく無口であった。マリアは一日の休みをもらつて、田舎で農家をしている自家へ行つた。中風症で半身不自由の老主人ゲハイムラート・ベルグマンは昼食後から、応接間兼食堂で安楽椅子にうずもれて、ピュウロウ公の回想録を読みながら、時々、居眠りをしていた。半ば白髪になつた主婦のベルグマン夫人は、女中のいない台所に立ちはたらき、老母の手助けをしている娘のエリザは、もう三十二の老嬢であるが、長い戦争中の栄養不足のためにすっかり健康をそこねてしまい、同時に青春をも失つて、蒼い皮と骨ばかりになり、編み物と靴下のつくろいに時を費していた。市役所に勤めている息子のオットーは、戦争で負傷した右側の人さし指が内側へくの字なりに固く曲つてしまつた手で、それでも結構小器用にピアノをひくのであるが、きようは国民の喪の日だと言つて、ピアノの蓋を開けようともしなかつた。

〔喪の休戦記念日〕『教育建設』昭和22年9月

伝言（※伯母という人に下宿の娘の危篤の報を伝えた）を終つて伯母よりも一と足先きに戻つて玄関へ這入ると、恐ろしく緊張した顔のマリヤ（マリア）が其処に棒立ちに突立つてゐた。

「Jauch」

「死なれました。」

痛々しくマリアが泣き出した。私は静かに階段の上の方を仰いだ。

もう暗かつた。そつと庭に出て見ると、暗い私の部屋の窓の隣りに、燭灯に照らされて明るい、娘さんの死の部屋があつた。二つ三つ、淡い影が其処に動いてゐた。足もとの、冬から春へとやつと甦りかけた地面に、雪鐘草の花が咲いてゐた。微かに、いぢらしく、淋しく咲いてゐた。

〔ラインの人々 一、雪鐘草〕『新樹』大正15年1月

4 ドイツ演劇からの影響

三代治が訪れたドイツは、第一次世界大戦のあとの敗戦国であった。青・壮年期の男たちの多くは戦争によって身体ないしは精神が傷つけられ、それ以外の人々も、終戦時から続く経済的困窮や物資・食料の不足で、多かれ少なかれダメージを受けていた。

だが、そのような社会情勢下でも、例えば三代治の最初の留学地・ボンでは、学生たちは意欲的に学問に励み、また芸術を愛していた。生活の貧しさが精神的な豊かさを必ずしも否定するものではない事が、心に刻まれたのは、ここボンでのことであった。

独乙敗戦後三年、インフレーション初期、フランス軍占領下にあつて、学生の殆んど全部は戦争の体験者で、日常生活の困窮はひどかつた。併し大学の内部は真摯と秩序を以つて厳然と自ら大学を守護していた。学生たちは藁入れパン二斤、悪臭の強いマーガリン、黒豆コーヒで昼食をすませて、一日の講義と夕方まで及ぶゼミナールに夜々として倦むことを知らない様子であつた。彼らの学習研究態度を見ると自分の心身もひきしまる思ひがした。併し、学生たちは快活さを決して失つてはいなかつた。ペー

トーヴエンを生んだ町のことゝて、人口十万に足らぬ小都市ながら、市立のペトールヴエン音楽堂、合唱団、交響楽団、劇場を持ち、ペトールヴエン音楽堂の毎週定日音楽会には教授も家族連れで、学生や音楽愛好の市民たちと音楽を楽しんでいる。日曜日になると、伝説に富むライン河畔の名所旧跡へ参々伍々、ライン民謡や学生の歌を歌ひながら遠足に出かける者、テニスに興ずるもの、ライン河にスカルを漕ぐものなど、彼等若い男女学生の輝くほどの快活さは流石に、「ボンの学生」の名にそむかぬものであつた。

（早川三代治「学都遍歴 ボン大学」『緑丘新聞』

昭和24年7月20日）

そして、1922年6月、ボンの隣の市・ケルンの劇場を訪れた時のこと。三代治は、その夜の三つのプロگرامにおいて、フリードル・ミュンツァーという女優がそれぞれ全く別の個性的な役柄で素晴らしい演技を見せてるさまを観て「舞台に第二の世界を創ること」（『聖女の肉體』跋文章稿）への深い興味に引き込まれた。それは、彼の人生で、かつてない感動とときめきの体験であつたと思われる。

時期的にも、その当時のヨーロッパ演劇は、オーソドックスな古典劇から様々な実験を経て現代劇や前衛演劇へ

と移行する過渡期にあたっており、いわば、最も混沌としていて斬新な時代と言えた。そのような時期に、ミュンツァーは、そうした世紀転換期の先鋭的な劇作家として注目されたアルトウル・シュニツラーの作品「文学」のマルガレーテや「別れの晩餐」のアンニイといった役柄を巧みに演じきったのである。それが、日本から来た一人の青年、早川三代治の心を捉えた。

小樽商科大学の早川三代治文庫に残された洋書を見ると、彼が、観た演劇の全てではなくとも、強く心惹かれたものに関しては、必ずと言っていいほど原作や戯曲を購入して、熱心に読みふけていたことがみとれる。また、特徴的なのは、表現主義演劇について多角的に紹介された本を数冊購入していることである。彼が、こうした書物から独学で脚本やドラマツルギーについて学び取り、さらには舞台芸術までも自分自身で造り上げたいなるほどに没頭したことは、彼が帰国後に折に触れて「書き／描き」残した多くの戯曲と舞台背景画がそれを証明している。



ボン大学絵葉書 1921年



フリードル・ミュンツァー絵葉書

三代治は、戯曲を書き始めてから2、3年後の昭和5年(1930)、ミュンツァーに宛て、舞台の素晴らしさに気づかせてくれた感謝の手紙を書き送った。そして、ミュンツァーからも、懇切な返礼の葉書が三代治のもとに届いた。

『聖女の肉體』 跋文章稿

私が劇作に強い興味を持つに至ったのは、ボンの学生時代に、ケルン市演劇座でその所演に接した諸々の演劇、就中、フリードル・ミュンツァ嬢の演技であった。

殊に一と晩の上演に、シュニツラアの「文学」のマルガレーテ、「別れの晩餐」のアンニイ、終りに「緑の鸚哥^{インゴ}」のセヴェリイヌによつて、舞台上に第二の世界を創ることの深い興味を与へられた。これがこの処女戯曲集を同嬢に捧げる所以である。

(※『聖女の肉體』に収録せず、草稿のみ)

早川三代治文庫所蔵 演劇関連洋書について

【表現主義、前衛、新芸術運動など】

フランク・ヴェーデキント（1864～1918）はドイツの劇作家。ドイツ表現主義の先駆者として、また不条理演劇の先駆者として知られる。彼の活動の初期はドイツにおける自然主義文学の勃興期にあたり、自然主義演劇の方面ではハウプトマンが注目されていたが、ヴェーデキントは反感を抱いていた。

一方、ヴェーデキントの作風は、登場人物の性格を極端に強調することが多く、セリフも、意思疎通のためというよりは、意志の通じ合わないことを暴く役割を果たすものであることが多い。

早川三代治は短編「我が屈託」の中で、「或る日。かねて読んであつたヴェーデキントの『地霊』を舞台の上に見た」と記していた。現在、早川文庫の中に『地霊』は見えないが、『シムゾン』『フランチスカ』があることから、相当に関心を寄せていたことが窺える。

『ダンス』（三幕の喜劇）の作者ヘルマン・パール（1863～1934）は、オーストリアの劇作家。ウィーン世紀末文化を代表する青年ウィーン（Jung Wien）の一員。印象主義・表現主義などあらゆる新芸術運動の先頭に立って活躍した。19世紀末から20世紀初頭にかけて、オーストリアの演劇は、のちに

「ウィーン派」とよばれた作家たちによって新たな飛躍を遂げたが、そのグループの中核をなしたのがヘルマン・パールであった。ホフマンスタールやリヒャルト・ベークホフマンに多大な影響を与えた。

ロベルト・ボダンツキー（1879～1923）はオーストリアのオペレッタ作家・評論家・俳優。第一次大戦後、無政府主義および自由主義的共産主義の立場で活動した。

ブルーノ・ハルト＝ウオーデン（Bruno Hardt-Warden 1883～1954）はオーストリアの脚本家・作詞家。彼は数多くのオペレッタやミュージカル・コメディの脚本を書き、また後には映画の脚本も手がけた。

ゲオルグ・カイザー（1878～1945）はドイツの劇作家。非常に多作な人物で、生涯に試みたスタイルもバラエティに富んでいる。第一次世界大戦後は、既成観念や道徳を風刺する問題作を次々と発表し、表現主義の第一人者として知られることとなった。ナチス台頭後は上演・執筆を禁じられ、スイスに亡命するも、不遇のうちに客死した。

フリッツ・フォン・ウンルー（1885～1970）はドイツ表現主義の作家・画家・詩人。コブレンツ生まれ。軍人貴族の家系。第一次世界大戦には将校として従軍するが、それを機

に平和主義に転ずる。「一族」（1918年）「広場」（1920年）等は表現主義の代表作であり、戦争の悲惨さを訴えている。

フーゴ・フォン・ホフマンスタール（1874～1929）

はオーストリアの詩人・作家・劇作家。新ロマン主義の代表的作家にして、ウィーン世紀末文化を代表する青年ウィーン派の一員。1891年、芸術至上主義を掲げる5歳年上のシュテファン・ゲオルゲと知り合い、彼の主宰する『芸術草紙』の寄稿者となった。初期には『痴人と死』などの世紀末的な雰囲気をもたえた韻文劇で名声を博したが、20歳代後半以降は古典劇に近代的解釈を加えた翻案作品を発表。また一方では、作曲家リヒャルト・シュトラウスと組み、『ばらの騎士』などのオペラや喜劇等を創作した。第一次大戦後はオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊に衝撃を受け、晩年は文化評論や書物の編纂を主に行った。

【早川三代治文庫におけるホフマンスタール作品】

・救われたベニス…5幕の悲劇

イギリスのトマス・オトウエイによる未完の戯曲「救われたベニス」の改作。スペイン大使ベドマール侯が加担した反ヴェネツィア陰謀事件の史実に基づく。

・塔…悲劇

ホフマンスタールの芸術創作期における中心的作品の一つ。1920年夏から1927年秋まで幾度も改稿された。

・イエーダーマン

イエーダーマンは「へあらゆる人」の意味であり、すべての人の代表であることを表す。内容は、裕福だが心の冷たい男・イエーダーマンのもとに「死神」〈善行〉〈信仰〉などが人の姿で現れ、男が信仰を取り戻してゆくストーリー。1920年にホフマンスタール自身の計画によりザルツブルクにおいて野外劇「イエーダーマン」が上演されて以来、現在に至るまで、ザルツブルクではこの野外劇が毎年恒例行事となっている。

・エレクトラ

ホフマンスタールの台本による最初のオペラ。題材はギリシャ悲劇を原話としているが、内容は改変されている。リヒャルト・シュトラウスがホフマンスタールの要請を受けて曲をつけ、ベルリンでの初演（1903年）から6年後にドレスデンで上演したものが、現在知られる形である。

・ばらの騎士

ホフマンスタールとリヒャルト・シュトラウスが初めて計画段階から共同作業をして創作した、ウィーンの貴族の婚約を題材とした喜劇。当初はごく軽いコメディとして企画されたが、

次第に構想が広がり、結果、全3幕からなる大規模なオペラとなつた(カット無しの演奏時間は約3時間20分)。

【ホフマンスタール関連書】

シュテファン・ゲオルゲ(1868～1933)は、ドイツ詩における象徴主義を代表する人物。代表的詩集は『魂の四季』『生の絨毯』など。青年期にパリでマラルメに会い、象徴主義的詩風に影響を受けた。ベルリン大学で学んだ後、1902年に『芸術草紙』を創刊。芸術至上主義に共感するホフマンスタール等の同志が集まり、彼らはゲオルゲ派とも呼ばれた。

アレクサンダー・モイッシ(1879～1935)はアルバニア出身の俳優。1900年代初頭、ハウプトマンやヴェキント等の演劇に出演し、また1920年のザルトツブルグ・フェスティバルにおいては、ホフマンスタールの作品「イエーダーマン」の主役を演じて名声を博した。

シュテファン・ツヴァイク(1881～1942)オーストリアのユダヤ系作家・評論家。長編・短編の小説や多数の伝記文学を著し、1930年代から40年代にかけて名声を博した。第一次世界大戦開戦当初は愛国的であり、軍務についていたが、ロマン・ロランからの影響で次第に戦争への疑問を深め、

やがてロランらとともに反戦平和と戦後の和解に向けた活動に従事した。第一次大戦後はオーストリアに戻り、1919年から1934年までザルトツブルクに滞在。この期間に多くの代表作を著した。

【早川滞欧時代の話題作】

ベアトリス・ドヴスキー(1866～1923)作の「モナリザ」は、1915年の初演当時、話題性のあるオペラとして評判を呼んだ。1911年にルーブルから盗難されていた絵画「モナリザ」が、2年後に発見されたという事件があったばかりだったからである。本作はいわゆるスタンダードオペラではないが、20世紀中は主要なオペラハウスで数多く上演された。

「コロオジン夫人」の作者ルドルフ・フランク(1886～1979)は、ドイツの演出家・演劇評論家・作家・翻訳家。彼は1918年から21年にかけて、フランクフルトとダルムシュタットにおいて舞台演出家および文芸顧問として勤めていた。早川三代治の短編「コロオジン夫人の唄」は、ボンの下宿の老夫妻の人生と、オペレッタ「コロオジン夫人」の劇中歌とを絡めた哀切な小品(『新樹』大正15年1月)。

フランツ・モルナール(1878～1952)はオーストリ

アーハンガリー帝国生まれの劇作家・小説家。本名はノイマン・フェレンツ。青年時には法律学生として、当時、国際都市として名高かったスイスのジュネーブで過ごした。戯曲「リリオム」は彼の代表作であり、「ブダペストのならず者」を描きながらもベルリンやウィーン等で上演され、多くの人々の共感を得た。

早川三代治は滞欧中に同作を観て、「ヘリオムはあらゆる国際人の心をつかんだ作であり、それはモルナールが真の故郷を持っていてそれを描いたからだ」（早川「芝居だより」）と考え、深い感銘を受けている。早川の蔵書を見ると、その他にもモルナールの劇を観たであろうことが窺える。

「マスコットちゃん」は作曲家ワルター・ブロンメ（1885～1943）の代表的なオペレッタの一つ。彼は1920年代から30年代にかけて、作曲家として成功し、多くのオペレッタをヒットさせた。彼は1923～4年にベルリンのメトロポリル劇場に舞台演出家として在籍し、この間「マスコットちゃん」ほか、彼自身のオペレッタのみを上演していた。

「ボンパドル夫人」は作曲家レオ・ファル（1873～1925）のオペレッタ。1922年9月9日にベルリンのベルリナー劇場で作曲家自身の指揮によって初演され、また1923年3月2日にウィーンにおいても上演された。その後、英語に翻訳されてロンドンで上演されたほか、イタリアやフランス等でも大きな成功を収めた。

【定番の名作】

「ミニヨン」は、作曲家アンブロワーズ・トマ（1811～1896）のオペラ作品。ゲーテの小説「ヴァイルヘルム・マイスターの修業時代」に大胆な脚色を加えている。

ルートヴィヒ・ガイヤー（1779～1821）はドイツの画家・作家・俳優。作曲家リヒャルト・ワーグナーの継父。彼の戯曲「幼児虐殺」は新約聖書のヘロデ王のエピソード（占星術でユダヤの王になる子供が生まれたと知り、自分の地位が脅かされるのを恐れてベツレヘムの2歳以下の幼児を殺させた）に基づいている。

フリードリヒ・ヘッベル（1813～1863）はドイツの劇作家・詩人・小説家。ドイツにおける19世紀最大の悲劇作家と評される。代表作に「マリア・マグダレーネ」「ヘロディア」と「マリアンネ」等がある。また「ニーベルンゲン」三部作は、ワーグナーの「ニーベルングの指輪」に影響を与えた。

「アイーダ」は、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）の曲で有名なオペラ。台本はアントニオ・ギズランツォーニ（1824～1893）。ギズランツォーニは他の作

曲家にも数多くのオペラ台本を提供しているが、ヴェルディと組んだ作品「運命の力」「アイーダ」「ドン・カルロ」以外は、現在では標準的レパートリーに入っていない。なお「アイーダ」は、イタリア・オペラにおける伝統的な韻文形式にとらわれない散文的作詞の試みもなされた意欲作であった。

ホフマン物語 三幕の幻想オペラ

フランスの作曲家ジャック・オッフエンバック（1819～1880）の4幕の正式なオペラ（オリジナルは5幕7場）。ドイツ・ロマン派の詩人E・T・A・ホフマン（1776～1822）の小説から3つの物語を用いて脚色したジュール・バルビエ（1825～1901）とミシェル・カレ（1821～1872）の同名の戯曲に基づいて、ジュール・バルビエが台本を書いた。ジュリエッタとの恋の場面で歌われる「ホフマンの舟歌」が有名。

【その他】

「町の子」(Mutter Landstrasse) はウイルヘルム・シュミット＝ボン（1876～1952）作の演劇。彼は初め音楽家を志したが、書籍商に転じ、各地の大学で学んだ。「町の子」（1901）は、シュミット＝ボンが世に認められるきっかけとなった伝説劇であり、その後彼は文筆活動に入った。

「田舎騎士道―シチリア農民の榮譽」は、イタリアの作曲家ピエトロ・マスカーニ（1863～1945）によるオペラであり、彼の代表作。本作はローマの楽譜出版社ソーンゾーニヨの一幕歌劇コンクールに応募して当選し、1890年の初演で興行的に驚異的な成功を収めた。中でも間奏曲が特に有名で、単独で演奏されることも多い。しかし、この作品のインパクトが余りにも強かったため、彼はその後も数多くの優れたオペラを作曲したものの、その印象が霞む結果となった。なお、同時代人のプッチーニ（1858～1924）とは友人でありライバルでもあった。

或る日。かねて読んであつたヴェデキントの「地霊」を舞台の上に見た。ルルといふ女のために三人の男が次々に死んで了ふ。ルルはその屍の上に哄笑する女である。閉場して劇場の外へ出ると僅か許りの粉雪が暖まつた頬にさらさらと降りかゝつた。

「わたくしはあんなお芝居は好きぢやありません。何故つて世の中は不愉快な事だらけなのに、娛しみに見るお芝居にまであんな事を見るのはきらい。」

バアテルト夫人は、自宅まで見送られる乗物の中でそういつた。

「我が屈託」

『ラインのほとり』(明窓社

昭和8年)所収

初出『北海タイムス』昭和2年3月30日〜4月5日

久し^{くわい}ふりで、アレキサンダア・モイツシイを舞台の上に見ました。伯林独逸劇場の舞台で「生ける屍」「ハムレット」「ドンカロロ」「シアレイ伯爵」なぞに見たモイツシイを当地の独逸国民劇場で出された「トレドの猶太女」で約一年ぶりに見たのです。(中略)

一体、モイツシイの顔位、役者ばなれのした顔は少いでせう。顔の輪郭は固く、鼻の孔と、口が大きく、彼の顔について談る者は誰れしもが醜いと云ふ一言で片付けてしまひます。それに体格も小柄です。然し彼が舞台上に演ずる姿を見ますと、醜男のモイツシイは全く別人のモイツシイです。固ばつた顔をした小柄な瘦男のハムレットは、舞台の上で殉情的な哲学はやりませんが、立派にハムレットの悩みを描き出します。(中略)

トルストイの「生ける屍」は三度見ました。一度はそのフェヂアの役を他の役者がやりましたからモイツシイのフェヂアは二度見た訳です。

「芝居だより」その一 『ラインのほとり』所収

初出『北海タイムス』大正13年12月13〜25日

5 島崎藤村との縁と戯曲創作

早川三代治が、島崎藤村の作品をいつ頃から読み、愛好し始めたのかは定かではない。だが、「流れゆく心臓」(『北海タイムス』大正14年3月)という一文から、彼が日本への帰国を意識し、まもなくインド洋への旅程に入るといふところで、藤村の『エトランゼ』を手にしたことが知られる。藤村の、外国における孤独の中で自身自身に對峙し深く自省した心境に、三代治も共鳴していたのかも知れない。

やがて三代治は、帰国からわずか3ヶ月後の大正14年4月から、北海道帝国大学において教鞭をとることとなった。帰日前にウイーンにおいて経済学者のヨーゼフ・シュンペーター(1883~1950)から受けた教示を心に置きつつ、経済学への数学の適用を重要視し、レオン・ワルラス(1834~1910) 経済学の一般均衡理論の父と呼ばれる)やヴィルフレド・パレート(1848~1923) ワルラスの論理の発展に貢献)の理論の研究につとめた。事実、早川三代治の著作『純理経済学序論』(昭和5年)は、日本において数理経済学の方法論を紹介した書としては最も早い時期のものであった(手塚寿郎「過ぎにし最近の十年に於けるこの国の数理経済学」『商

学討究』昭和11年2月)。

だが一方で、創作意欲も、彼の心を決して去ることはなかった。むしろ、留学期にヨーロッパで受けた様々な芸術的な刺激が、彼を一層文学方面の道へ駆り立てたといつてよい。帰国後まもない大正14~15年、おそらく滞欧中にすでに書かれていた「ベネチア散文詩」や「ラインの人々」を『新樹』(文学仲間であった歌人・戸塚新太郎が創刊した短歌・文芸誌)に立て続けに発表した三代治は、昭和2年、敬愛する島崎藤村に自作を送り始める。短篇小説「青鶴あおしぎ」、戯曲「新しき縄」の初稿(「吹雪の底」↓「強い女」↓「新しき縄」と改題)などである。このうち、「新しき縄」初稿が藤村の心を惹きつけた。

「新しき縄」は、北海道・後志の山間部の駅通(えきてい)。北海道で、交通の不便な時代に人馬の乗継ぎを扱った施設。宿泊所を兼ねた)が舞台である。一人の巡査が囚人となるべき女に縄をかけ、札幌へ護送するために冬道をひきたててゆくが、吹雪がひどくなり、遭難しかけたのを、かえって女に助けられる羽目になる。やっと駅通についた二人の心には、やがて語らい合う内に愛情が芽生え、一夜を過ごしたのち、女が徴役を終えた後に夫婦になる約束をする所で幕となる。女が逃げないように巡査が繋いでいた(縄)が、最後には二人の言葉の中で、生

涯のきずなをつなぐ〈縄〉と意味づけられるという、一種のどんでん返しの妙味がある作である。

藤村は「新しき縄」の初稿を自由劇場を主宰していた小山内薫に送り、また、三代治から送られてきた「聖女の肉體」(戯曲)を劇作家・批評家で『三田文学』主宰者の水上瀧太郎(本名・阿部章蔵)に紹介した。本来ならば、「新しき縄」は昭和4年には小山内薫により『劇と評論』誌に掲載されるはずであったが、昭和3年暮れに小山内が急死して『劇と評論』誌も発行打ち切りとなってしまうため、話は宙に浮いてしまった。さらに運の悪いことには、次に水上が『三田文学』に掲載を考えたところ、検閲の下見の段階で、発表は許可できないと申し渡されてしまった。仮にも巡査とあろう者が女囚と恋におちいる、というプロットが問題とされたらしい。

紆余曲折を経た「新しき縄」であったが、昭和7年によくやく、『劇と評論』社によって「〈警察署〉を〈屯所〉、〈巡査〉を〈巡羅〉と直す」という妥協策が提案されたことにより、同誌復活第2号(昭和7年6月)で日の目を見ることとなった。そして翌年12月29日から31日まで、花柳章太郎主演で新劇座第9回公演に際し上演された(於・帝国ホテル演芸場)。演出は、小説家・劇作家の久保田万太郎と、同じく小説家・劇作家で有島武郎の実弟の里見

淳とが担当した。

なお、この作品には後日談がある。終戦直後の昭和24年、来演中の新生新派一座の花柳らと再会した三代治は、「新しき縄」の再上演希望の話を聞かされた。そして本作は、3年後の昭和27年11月に、新生新派一座によって演じられ、大阪朝日開局一周年記念の際に放送されている。また、昭和34年にはラジオドラマにリライトされ、この時もやはり花柳章太郎らの声の出演で、ラジオ東京にて2月14日にオンエアされた。おそらく、花柳にしてみれば、女囚となるまで身を落としながらも、持前のさばさばした気性と、独特の力強い母性として男性の心を支える主人公・馬場とみという女性性は、他のどんな新派劇にもないキャラクターであり、印象に強く残っていたのであろう。

女 おめえさ、その縄をかける事、忘れたべさ。外套の隠しにある縄を。おめえさ、おらとこ縛つて行かないば駄目だべよ。

男 (縄を取り出す事を躊躇ふて) 縄か。そんな事は。女 縛らなければ駄目だべ。おら、まだ咎人だもの。

男 おめえは、もう、俺のものだ。おめえを一^い刻でも自由にして置いてやりたいんだ。

女 おらあ、おめえさのもんだ。おら、縄つこ^{めんど}かけられても、おめえさが、おらとこ、可愛^{めんど}がつてければ、おらあ、本統に自由だ。縛られても、懲役さ行つても自由だ。おらとこ自由にして呉れたければ、おら頼むから可愛^{めんど}がつてくれやな。おらとこ捨てないでくれやな。おら、いつまでもおめえさのもんだからな。さあ、早く立つべえ。今朝つからおら達二人つぎりの世の中にするべえ。おら、おめえさのために辛棒するべ。おめえさは、おらのために辛棒してけるべさ。それが楽しみだ。さあ、縛つてくれさ。こゝの爺さんが不思議がるべ。おめえさが縛るなら、おら、ちつとも痛くも悲くもないだよ。

男 (女に縄をかける) とみ、俺は腑甲斐ない男だ。

でも捨て、呉れるな。

女 え、え、(驚嘆して) おらに捨てるなつていふだか。そ、そ、それは、おめえさの本心だか。(泣き崩れる。吹雪が咆哮して、家鳴りが続く。)

幕

「新しき縄」 『聖女の肉體』(明窓社 昭和七年) 所収



舞台「新しき縄」

左・藤村秀夫 右・花柳柳太郎



「新しき縄」 吹雪の場面



「新しき縄」 舞台全景

早川三代治の書いた戯曲は、発表され、戯曲集に収録されたものだけでも17本に及ぶ。それらはすべて、昭和初年から8年にかけて集中的に執筆された。

第一戯曲集『聖女の肉體』

表題作、「処女林の中」、「新しき繩」ほか7本

第二戯曲集『トレ グラチエ』

表題作、「ボンの復活祭」、「ラインの流れ」ほか5本

第三戯曲集『マダム レア』

表題作、「土にて創られたるもの」、「白い塔」ほか5本

また、これまで知られていなかったことであるが、三代治は舞台芸術についても留学時代から独自に研究しており、自ら原案図も描いていた。

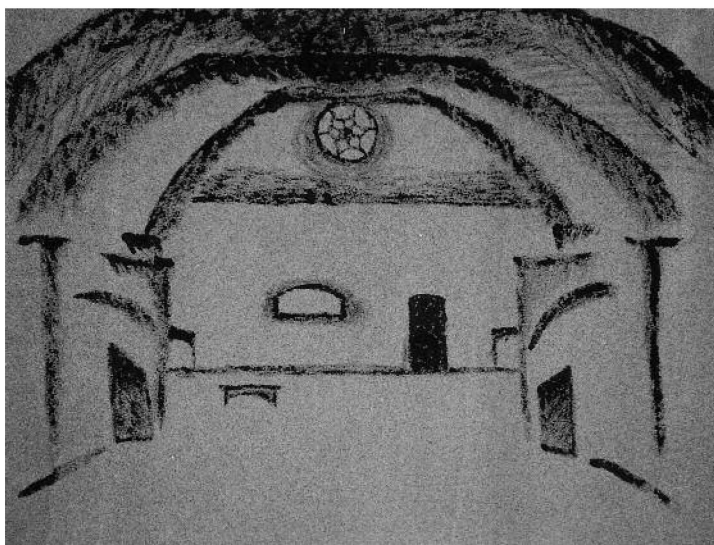
当時のヨーロッパの演劇界では、作品の内容だけではなく、舞台装置や背景美術も、表現主義その他の前衛芸術の影響を受け、斬新な工夫がされはじめていた。極端に大道具小道具を廃してシンプル化した舞台や、メカニカルな雰囲気や強調したもの、明暗や色のコントラストで視覚にある種の衝撃を与えるようにしたものなど、舞台を見れば見るほどに、いつも誰かが様々な新しい可能

性を拓いている時代であった。その意味で三代治は青年期に、演劇という総合芸術の、きわめてエキサイティングな変化の時代に遭遇していたのである。

三代治の戯曲で舞台化されたのは「新しき繩」のみであるが、その原案「吹雪の底」の舞台美術案を描いた画は残っており、そして「新しき繩」の舞台写真を見ると、実際に配置がある程度反映されていたことがわかる。また「白い塔」という作品に関しては、水彩画が8枚、舞台装置自体を設計した図も1枚残っており、三代治の中ではかなりイメージが具体化していたことが窺える。彼の脳裏には、俳優と共に、舞台装置や照明がダイナミックに動く様までもが、生き生きと思ひ描かれていたのであろう。



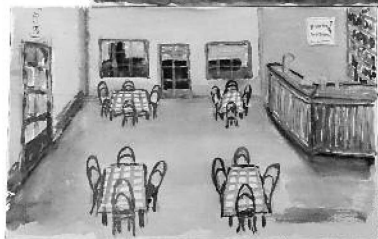
早川三代治画 戯曲「聖女の肉體」舞台 水彩



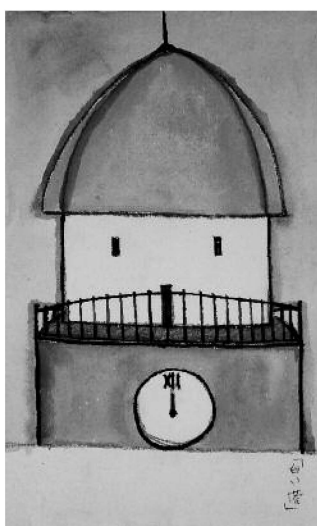
早川三代治画 戯曲「聖女の肉體」舞台 (画材不詳)



早川三代治画
戯曲「白い塔」舞台



〈白い塔〉内部構造



〈白い塔〉外観

6 郷土作家 早川三代治

早川三代治は、自分の生まれ育った小樽を、そして後志の自然を深く愛していた。彼は大きな商家の生まれではあったが、決して街場のひ弱な子供などではなく、父と共に猟銃を背負って、猟をしながら近くの山々を廻るのが好きな少年であった。そのようにして山林を踏破することが、親の所有する土地やその周辺を見て歩くことでもあった。

早川家は、前田村（現・共和町）など、道内数ヶ所に土地を持っていたが、チロロ（場所不詳。小樽近辺の山地か）にも農場を有していた。その近くの村には三代治の乳母も住んでいて、彼はよくそこに泊まりにいらしたようである。三代治は、旧制中学時代に父親とその地を改めて訪れた時の印象を、「チロロの農場にて」という短編に記している（初出「村の印象」『文武会々報』大正8年3月）。

その夜、私達は厚い藁布団の上に、身を投げ出して、深く、安々と眠った。

深い、夢のない、蜜の様な眠りから覚めると、私は軟かくも、軽くもなつた目瞼で、部屋の中のまぶしい縞模様様の光線と戯れはじめた。藁の匂ひと、秋

のかすかな香りが、土の香と一緒に部屋に充ちあふれてゐた。眠つてゐる間に開け放してくれた窓が、小さい光の様だつた。見えるのは青空でも、木でも、山でもなしに、きら／＼した輝きばかりであつた。いつも夜の目の明けきらぬうちに、私の寝室の窓をそつと開け放して、夜明方の泉の様な空気と薔薇色の明りを入れて呉れたのは私の可哀い、乳母なのであつた。私には此乳母に聴いて貰ひ度い子供心の不思議が沢山あつたのであつた。そして、今では私は、乳母から本統に聴いてほしいものの多くを持つ青年になつたのだ。

朝食は乳母の家から来た牛乳と、生みたての卵だつた。乳母は万事呑み込み顔に、さ／＼くれ立つた手だが、昔しなれ切つた手加減で、全く西洋風にポイルドエッグを土瓶の湯で料理して出した。父は上機嫌になつて、乳母の手まめなのをほめ立て、家へ帰つて、せめて一週間に一度でもこんな甘いのを食べたいものだと言ひ出した程だつた。

（「チロロの農場にて」短編集『青鷗』昭和8年）

わら布団の中に寝、自然の光と土の香りで起き、新鮮な牛乳と卵で朝食を取る。あたかも「ハイジ」に描かれているような、自然と渾然一体となつた生活がそこには

あつた。その意味では、彼は確かに〈地主の子〉ではあつたかもしれないが、その在り方は、西欧における地方の小領主の子のような、土地に根ざした、素朴なものであつたように思われる。

それに三代治は、美しい土地だからといって必ずしも幸せな生活が営まれていくわけではないことは、早くから肌で感じ取つていた。自然に囲まれたチロロは、反面、不便な山奥で医者も近くにおらず、冬に出産した若い女性が出血多量で亡くなり、赤子も凍死するという悲劇もおこつた。懐かしい乳母も、彼が再会して間もなく、腸捻転に苦しんで手当も受けられないまま亡くなった。地所を有するということは、そこに住む人々の暮らしの様々な局面にも向き合わなくてはならないことであり、ネガティブな側面から目をそむける訳にはゆかない。そうした面に対し、時には悲しみ、また時にはその原因に疑問や憤りを感じながらも、三代治は根気よく対応していった。きれいな事ではないのが〈生活〉であり、また〈故郷〉そのものであつた。

また、そうした愛情が如実に作品に表れているのが、昨年新たにその草稿の存在を御紹介した「敗戦前後」である。この作品は、空襲・敗戦といった常ならぬ状態に置かれていた小樽の状況を克明に描いていることでも稀

な作品であるが、その独自性の基調をなすものは、そのような非常時に置かれながらも〈日常〉意識を大切に生きていく小樽の人々の様子であり、親戚や地縁者との心の交流であり、幼い息子達への愛情である。かつて、第一次大戦敗戦後のドイツの荒廃と混迷を目の当たりにした経験から、〈今度は日本人が、小樽の人々が、そして自分の子供達がそうした苦境に直面するのではないか〉との予感に不安になりながらも、起こっている出来事は心に刻み込んでゆこうとする三代治の精神には、心を動かされずにいられない。



早川三代治『青鷗（あおしぎ）』明窓社
昭和8年12月

数年来庭の手入れも出来ず、雑草と南瓜との荒庭に化してしまった庭に出て、松や水松や楓の木の茂りへ行ってみると、五、六人の警防団員が木や庭石の上に登ったり、木の蔭に身体をひそめたりして、竹垣の上から見える港の北部、丁度浮船渠のあるあたりを眺めてゐた。

「ああ、射ってる。射ってる。盛んに射ってる。」

と木の上の一人が叫んだ。

「何が見えるんですか。」

と私は木の上の男へ訊ねた。

「高射砲を盛んに射ってるんですよ。沖の方に敵機が一つ、しつこく飛びまはってるんです。悠々と飛んでおますよ。高射砲陣地をねらってるんですね。」

と樹上の男が言った。是等の五、六人の警防団員は待機しながら、空襲見物をしてゐるのであった。

〔敗戦前後〕草稿 昭和22〜23年頃

小樽に一時の僑寓を持つ勤人たちが、表面のがさつな感じに似ず、内面の人なつつこさをこの土地の人々に見出すといふこと、案外棲みよい土地だといふことも、あながち通り一ぺんの空お世辞ではないやうである。これがこの「穴」のやうな海港都市の持つ味、そこまでこの土地に住む人人によつて作り出されてきた生活の稔りであらう。

小樽は私にとつて生まれた土地であり、死ぬ土地であらう。生地であり、墓地であらう。それ故にこそ私の故郷なのである。私の日頃の散歩の一步一步は、私にこの土地の精魂を暗示し、或は啓示してくれる。小樽はあらゆる意味で、私の養ひの土地である。

〔養ひの土地——小樽——〕『週刊朝日』北海道版 昭和21年10月13日

7 晩年の挑戦——有島を主題とした小説の構想

早川三代治は、昭和37年8月22日に小樽の実家で脳梗塞を発症し、同月28日に死去した。〈土と人〉シリーズの第五部「地飢ゆ」は倒れる前日までにほぼ推敲が終っており、第六部「藁（ひこばえ）」が構想ノート・メモのみで遺されていた。そのため、三代治の絶筆は「地飢ゆ」であり、惜しくも書かれなかった作が「藁」だと、従来はそのように解説されていた。

だが、実は、「藁」の他にもう一作、構想メモから準備段階まで進んでいながら、着手することが出来なかった小説があった。それが、有島武郎を主人公とした作品「或る地主」である。

自身も〈早川家〉の継承者として長らく地主であった時代があり、経済学の研究でも常に間接的に農民や労働者と関わり、否応なく〈有島先生〉の思想と生涯を意識して生きざるを得なかった三代治。有島の死を知った瞬間のことは一度も筆にのせなくとも、有島の生き方について、自分なりの描き方で創作の対象にすることを避け続けることはできなかったであろうし、むしろ、三代治の人となりを考えれば、機さえ熟せば全力を傾けて書いてみたい、と考えていて当然である。

構想は五章立てであった。

- 第一章 最初の農場行
- 第二章 成懇の時
- 第三章 武の死
- 第四章 土地解放
- 第五章 武郎の死まで

これを有島武郎の作品と照合すると、第一章が、有島の小説としての絶筆と言われる「親子」に出てくる時期と場面にあたる。三代治は、〈有島武郎と農場〉の関りを一つの大きな柱として、武郎だけではなく、その父・武を重要な登場人物に据え、作品の五分の三を〈親子の物語〉として描こうとしたのである。

また、メモを見ると、この作品のコンセプトとして重要な点が二つある。一つは「有島武郎における自然と社会」という表題のメモで、〈カインの末裔〉の主人公の仁右衛門は自然と対立させて描かれているが、実は、社会と対立して見られるべきである」と書かれている。これは、有島の、北海道を描いた名作の一つとされている「カインの末裔」についての、作者・有島自身の創作意識に対する、ある根源的な批評だと思われる。

もう一つは、有島の父・武を、ジャン・ジャック・ルソーの「新エロイズ」に心酔した、いわばその世代なりに新思想の洗礼を受けた人物として描こうとしているところである。

有島の「親子」に登場する父親は、言うまでもなく有島武をモデルとしているが、その人物像は頑迷で疑い深く、小作人や管理人に厳しい地主として描かれていた。作品の中で明言こそされていないが、地主親子（有島父子）と小作人との間に超え難い心の溝があるのは、その父親のキャラクターのせいであると、明らかに読み取れるように書かれている。ここに出てくる父親のイメージは、おそらく、農奴の恨みを買って殺害されたとされているドストエフスキーの父親像をふまえていたのであろう。

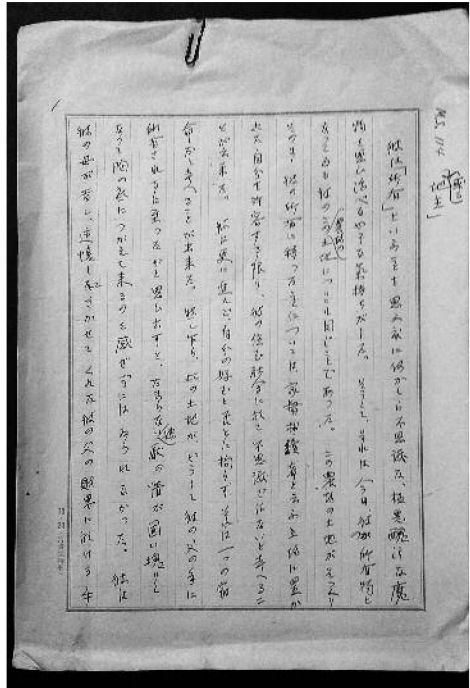
だが三代治は、有島武を、「新エロイズ」に登場する農場経営者・ヴォルマール一家のありように心酔し、それを理想とした人物として描きなぞと企図していた。ちなみに、ヴォルマール家は、作品の女主人公が不本意ながら嫁いだ嫁入り先ではあったが、農場経営の仕方は理想的であり、農夫や用人たちは主人の方針のもと、調和的に生活している。有島武その人が、それを自分で実現できる人であったか否かはまた別問題であるが、少なくとも、三代治は、武もまた、武郎と時代こそ違っても、理想を掲げて北海道の農場経営に乗り出そうとした

人物であったと描こうとしたのである。そして、ひいては、有島武郎自身の生き方および死の選り方をも相対化しようとしていた。言い方を変えれば、「或る地主」は有島武郎の物語であるばかりではなく、近代社会において「地主」であることを選んだ人々の名譽を回復するための物語となるはずだったのである。

この作品を構想するにあたり、三代治は、自らニセコ（狩太）に息子の佳郎と足を運び、また、岩内の木田金次郎に協力を求めて、かつて木田が有島と再会を果たした場所である有島農場の事務所を書いてもらっていた。木田金次郎もまた、有島の作品「生れ出づる悩み」においてモデルにされた人物である。この二人が、人生六十年を過ぎて、有島武郎を対象化する小説のために協力したという事実は、仮に彼らが批評的な立場でのみ書くつもりではなかったとしても、ある意味、非常に象徴的な出来事であったように思われる。

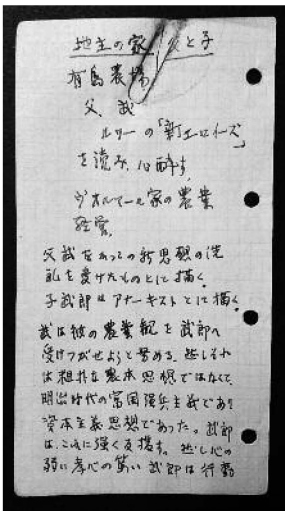
当時の北海道長官は園田安賢であった。長官は北海道の漁場を民間へ払下げやうとし、当時の有島武にも、その払下げ申請をすゝめた。然し、有島武は漁場の払下げではなしに、官有未墾地の払下げを申請して、後志国の山間に土地を獲得したのであった。同じく、その頃に、曾我祐準氏も同じ地方で有島武のそれと隣接した千町歩の土地を払下げて貰った。処が後年、函館から小樽へ、今日の国鉄の前身の日本鉄道が敷設される機運に及んで、日本鉄道は、有島農場と曾我農場との境界へ鉄路を通じたのであった。当時、日本鉄道の社長は有島武であった。

(本文の一部より)



「或る地主」構想メモ (本文の一部)

有島武郎の父・武に対するこだわりの一端は、武が鉄道会社社長の地位を利用して有島農場近くに鉄路を敷設したことに起因するとしている。



「或る地主」のためのメモ (設定メモ)

地主の家 父と子

有島農場

父、武

ルソーの「新エロイーズ」を読み、心酔す
ヴォルマルル家の農業経営

父武をかつての新思想の洗礼を受けたものとして描く。

子武郎はアナキストとして描く。

武は彼の農業観を武郎へ受けつがせようと努める。然しそれは粗朴な農本思想ではなくて、明治時代の富国強兵主義であり資本主義思想であった。武郎は、これに強く反撥す。然し心の弱い孝心の篤い武郎は行動に訴へる事ができず、悶々の情が内攻す。

(メモ1枚目)

《早川三代治の世界》

8 三代治と絵画

早川三代治は、少年の頃からの絵画好きであった。小樽中学校時代にはすでに、校内の絵画愛好会に参加している。また、大学時代には、小樽の文芸雑誌『白夜』に参加したが、この雑誌は同地の若手画家とのつながりが深く、同人たちで絵画展覧会を企画して小樽の青年洋画団体同士の協力と融合をはかるなど、芸術運動に対して非常に積極的だった。三代治が『白夜』同人と長きにわたる友情を結んだのは、このような美術好きの点で気脈が通じたからであつたと思われる。

三代治はまた、有島武郎作「生れ出づる悩み」の主人公のモデルである岩内の漁夫画家・木田金次郎が大正8年に北海道帝国大学の黒百合会に初めて出品した際、その展覧会を見に行き、それが機縁となつて木田と親交を結ぶようになった。

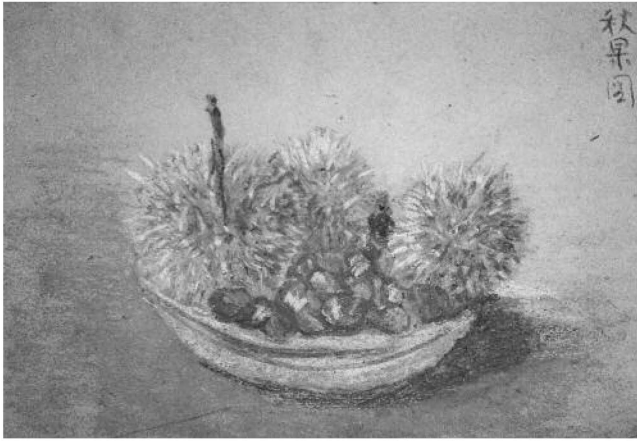
三代治の小樽における文学仲間の高田紅果・本間勇児・戸塚新太郎と、美術青年の船樹忠三郎・溝渕健児は、三代治がドイツ留学に出掛けた直後、木田金次郎を交えた6名で〈緑人社〉という素人絵画団体を結成する。そして、異国にいる三代治に、活動の様子を筆まめに手紙に書いて

送り続けた。もし、三代治が留学に旅立たなかつたらば、彼は間違いなく、7人目の緑人社メンバーになつていたことだろう。

帰国後の三代治は、すぐに北大に勤務したこともあり、本格的に絵を始めることはなかつたが、それでも折りに触れては絵筆やクレヨンなどを手にした。繊細な線のタツチや柔らかな色遣いに、心こまやかな人柄がしのばれる。



無題 花



秋果図



無題 あじさい

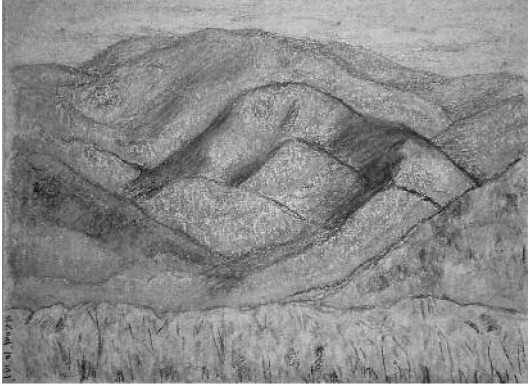
早川三代治は風景画を好んで描いたが、その中に、終戦直後の小樽を描いたクレヨン画数枚がある。戦争が終結して迎えた静かな秋の日々、三代治はどのような心で景色に向かっていたのだろうか。

彼は、終戦の日に山の手の崖の上から町を見遙かした時の感慨を、次のように記している。

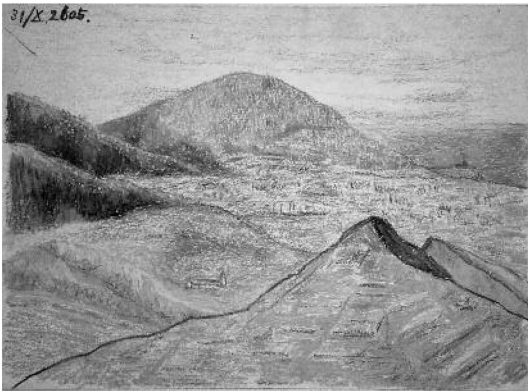
私は海や船や市街を眺めてゐるうちに自ら目がしらが湿るのを感じた。

「戦争が終ったのだ。然かも我々は敗けたのだ。この国土はどうなるのだらう。然かもこの自然の静謐さはどうだ！」
海も船も市街も、その上を掩ふ大空も頭上に浮ぶ夏空も市街を取りまく山々も我々の敗戦を知らず顔に悠然として
いづれも皆その在り場所にある。愁ひも悲しみも疼みもなく、ありのまゝにある。

〔敗戦前後〕草稿



無題 風景 昭和21年(1945)10月31日



無題 風景 日付同上

9 イタリア・スケッチ旅行

三代治と同じ頃にベルリンに留学していた昆虫学者・小熊^{まもる}焯は、有島の初期の教え子であり、また北大の画会「黒百合会」の創設メンバーでもあった。絵画好きの2人はおのずと親交を深め、1924年2月からは一緒にイタリアに旅行し、様々な名所旧跡を巡りながらスケッチにいそしんだ。その旅行の少し前の時期、2人が共に絵を描いていると知った木田金次郎は、嬉しさから次のような手紙を書き送った。

兄も絵を 油絵を遂うく初められたとのことですが、どんなものが出来たか一時も早く見度ひものです。どんなスタイルをとつておられますか。

是非とも一枚送って見せて下さひ。兄が帰朝するまでなぞ待つておられません。これはくれぐれもお頼み申します。小包で小さなものでも一つ送つて見せて下さるとうれしいです。待つておます。

(中略)

兄のものも ストープになぞ決して入れないでみなもつて帰つて下さい。そして一緒に札幌と小樽で展覧会をやりませう。



ローマ近郊の写生旅行 1924年3月頃
左・早川三代治 中・小^{まもる}熊焯
右・八木沢文吾(県立愛知医科大学)

木田金次郎 早川三代治宛書簡
大正12年(1923)10月6日以降(推定) 封筒欠



ベルリンにて 1923年4月
左・小熊捍 右・早川三代治



早川三代治 油彩画スケッチ板
滞欧中制作



早川愛用のイーゼル・絵具箱・パレット

10 北欧旅行

ドイツ滞在二年目、1922年の夏、三代治は、県立愛知医科大学(のちの名古屋大学医学部)の酒井繁(教授、内科学、当時ケルン在住)と金沢高等工業学校(現・金沢大学理工学域の前身)の中本実(教授、無機化学、当時アーヘン在住)と共に北欧をめぐる。ベルリンで落ち合った三人は、ハンブルグからデンマークのコペンハーゲンを経て、ノルウェーの、現在はオスロと呼ばれているクリスチャニア市に入った。

三代治が北欧への旅に赴いたのは、伝え聞くフィヨルド(三代治はフィヨールと表記)の美しさに興味を持ったからでもあったが、さらに大きな理由があった。それは、少年期の自分を惹きつけたノルウェーの文学者、ピョルンソン(1832~1910、作家、1903年にノーベル文学賞を受賞)やヘンリック・イブセン(1828~1906、劇作家・詩人・舞台監督)の故郷をじかに見ゆかりの場所に行ってみたいという思いがあったからである。

北欧の作家は、実は、日本人にとって馴染みが深い。例えば、日本の新劇運動は、イブセンの「人形の家」の上演から始まったと言われている。また、ピョルンソンは、現代でこそあまり知られない名前となったが、かつて

彼の少年小説「アルネ」などは、その牧歌的な美しさで子供たちに愛読されていた作品であったという。

三代治は、自らが抱いていた作家に対する憧れの気持ちなどを、ノルウェーの旅で出逢った女性に対して語った。

「……お話しして下さいませよ。遠いお国のお話しを」
私は何を話していゝのか話の緒口を持たなかつた。私は突作に唯少年時代の思ひ出に連想して「アルネ」の物語を頭に浮べた。

「……私を今、かうして此の国へまで連れて来たのは私が中学の初等生の時分に読んだ「アルネ」の感化でせうか」

「……ピョルンソン?? まあ、ほんとうに??」

「……そうなのです。「アルネ」は私たちの間に随分読まれたものです。尤も私個人について云へば、トルストイの「幼年時代」の方が先きでしたが、自分の幼年時代の憧憬の夢をみかへしてみる事を覚えたのは「アルネ」のおかげでした」

私はこんな話が彼女を退屈させはしまいかを恐れた。どんな風にこの話が彼女に反映するかを見定めやうと私は言葉を留めた。

「……わたくし、お話しに非常に興味を持ちます。「ア

ルネ」が遠いく、東方へ行つて其処の若い人たちの胸をうつなんて、わたくし、一度でも想像してみただせうか。勿論「アルネ」としては尤もなことです。けれどあんなにも遠い、遠い国で……」

「……やがて「ブランド」が私を揺り動かし出しました。山から下りて来た荒神のやうに」

「……そうでせうとも！」彼女は強く、深く、大きく肯づいてみせた。

(早川三代治「クリスチアニア峡湾」)

『青年論壇』 昭和23年1月)

彼は、このように、旅先で出逢つた北欧の人々と言葉をかわし、文学的話題にとどまらず、その土地々々の様々な生活に思いを致して、自らの世界観を広げた。この時の三代治の旅は8月6日から9月11日までの一ヶ月強、立ち寄り先は、上記クリスチアニアから、シーン、ダーレン、オツダ、ベルゲン、ボツス、クドバンゲン、バルホルム、フローム、ミュルダールと巡つた。そして再びクリスチアニアに戻つたあと、スウェーデンのストックホルムを経て帰独した。

この旅に関して、三代治は詳細な旅行記「フィヨールの旅」の草稿を残している。だが、活字になつたのは、ほんの最初の部分でしかない。「イプセンの故郷」として

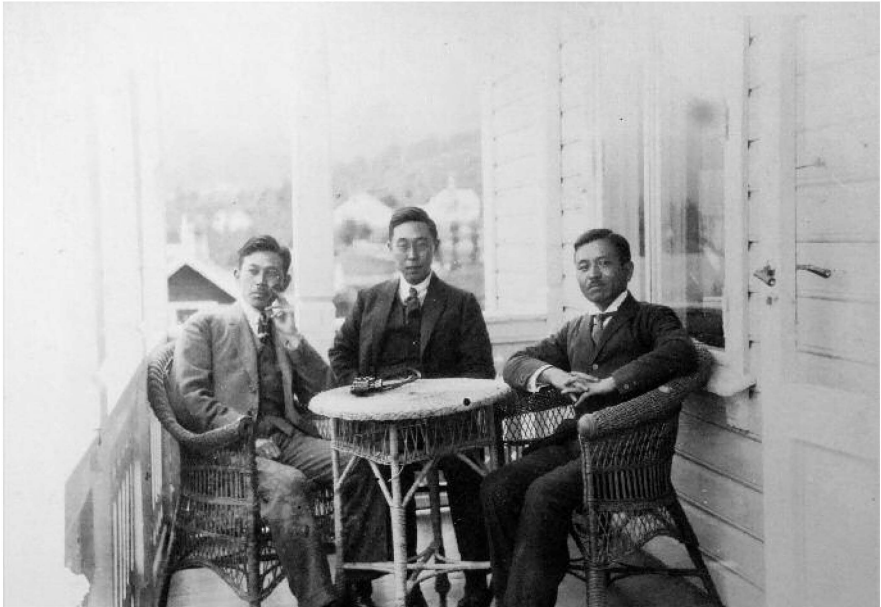
北海タイムスに5回掲載されたもの(昭和4年10月)と、昭和23年の「クリスチアニア峡湾」のみである。もし全編が、帰国後の早い時期に刊行されていたら、日本人の北欧旅行の紀行文としては非常に稀有で、貴重な作品となつたはずと思われる。



クリスチアニア近郊スキー場レストラン 8月18日
左から酒井繁・早川三代治・中本実



クリスチャニア イプセンの墓畔にて
8月18日



バルホルム ホテルクビクネにて 8月26～27日
左から中本・早川・酒井



クドバンゲンにて
フィヨール通いの船
8月26日



シーンからダーレンへの運河 8月21日
前・早川 後・酒井



ストックホルム市にて
8月31日～9月1日



オツダ近く ロートホス(ラテフォッセン)
滝見の三代治 8月23日

早川三代治 1922年（大正11）北欧旅行 旅程

同行者 酒井 繁 県立愛知医科大学教授 内科 ケルン／ベルリン在住
 中本 実 金沢高等工業学校教授 無機化学 アーヘン在住

- | | | |
|-------|--|--------------------|
| 8月6日 | 中本実とケルンで落ち合い、寝台列車でベルリンへ向かう。 | 車中泊 |
| 8月7日 | ベルリンで酒井繁と会い、同行者揃う。以下数日、旅行準備。 | |
| 8月14日 | 23：55 発夜行にて北欧旅行に立出。 | 車中泊 |
| 8月15日 | ハンブルグ着。同港見学。夕方、夜行にて立出。 | 車中泊 |
| 8月16日 | デンマーク・コペンハーゲン着。ビザ取得ほか。 | ホテルテルミニユース |
| 8月17日 | 正午、海路、ノルウェーのクリスチャニア（現オスロ）へ向かう。 | 船中泊 |
| 8月18日 | 朝7時入港。夕方酒井繁とイプセン、ビヨルソンの墓に詣でる。 | ホテルプリストル |
| 8月19日 | 朝8時列車に乗り14：40頃シーン（シーエン）着（イプセン生地）。 | |
| 8月20日 | 同地滞在 | |
| 8月21日 | 朝7時、ダーレン行き汽船（運河）。18：30頃着。 | ホテルダーレン |
| 8月22日 | 朝8時、自動車でおッダへ。山上湖畔で昼食の後、自動車乗換え。
18時着。 | グランドホテル
グランドホテル |
| 8月23日 | 午前、山へ氷河を見に行く。午後、滝を見に行く。 | グランドホテル |
| 8月24日 | 8時、船でフィヨール（フィヨルド）を北上。
ノルトハイムズンドで上陸、昼食。
自動車でトレンゲライド駅へ行く。20時頃、ベルゲン着。 | ホテルノルゲ |
| 8月25日 | ベルゲン見学（魚市場、近郊）。18時、ボッスへ列車で向かう。 | ボッス泊 |
| 8月26日 | 7時、車で立出。クドバンゲンで乗船、ゼグン入江を経て、
15時にバルホルム着。 | ホテルクビクネ |
| 8月27日 | 同地滞在（行程最奥地）。 | ホテルクビクネ |
| 8月28日 | 朝9時半出発するも、パスポートを忘れ、一人引き返す。
船待ち泊。 | ホテルクビクネ |
| 8月29日 | 15時出港。フローム上陸。19時、馬車でミュルダールへ。
同駅で23時発急行に乗車。 | 車中泊 |
| 8月30日 | 朝7時、クリスチャニア着。旅券手続き。
18時、スウェーデンのストックホルムへ。 | 車中泊 |
| 8月31日 | 朝9時、ストックホルム着。酒井・中本と再び合流。
国立博物館他。 | ホテルコンティネンタル |
| 9月1日 | スカンゼン遊園地（民俗住宅）、ストックホルム王城。
夕方、列車にて同地発。 | 車中泊 |
| 9月2日 | 朝、トレレボリで船に乗換え、昼、ザスリッツで列車に乗る。
20時、ベルリン帰着。しばらくベルリンで休暇を過ごす。 | |
| 9月10日 | 夜行寝台にて、中本実と共にベルリン立出。 | |
| 9月11日 | 9時半、ケルンにて、中本はアーヘンへ、三代治はボンへと
別れ帰宿。 | |

（早川佳郎氏提供）

早川三代治年譜

(三代治の年齢は満年齢)

明治28年(1895) 6月22日、小樽区入舟町にて、父・岩三郎、母・志満の長男として生まれる。

生家は、明治4年に渡道した祖父・早川両三が興した商家で、精米・精油・醤油醸造などの家内業ならびに雑穀・紙文具などの商取引に携わり、屋号を丸越早川商店と称していた。

明治34年 三代治、量徳尋常高等小学校尋常科に学齡未滿(5歳)で入学。

明治35年 早川家、小樽区^{ましまかえ}真栄町に転居。

明治38年 早川家、稲穂番外地(現・緑町)に転居。このころより家業は不動産業および農林水産品取引が主体となっていた。

明治41年 三代治、稲穂尋常高等小学校高等科一年に転入学。庁立小樽中学校入学(12歳)。10月、弟・昇誕生。

明治42年 11月、祖父・両三死去(65歳没)。父・岩三郎、二代目両三を襲名。

明治43年 英語教師サミュエル・バアトレットから、初めて、米国の革新的なヒューマニスト詩人ウォルト・ホイットマンの話の聞かされる。

明治44年 三代治、中学四年生の後半を病床に過ごし、翌3月まで休学(16歳)。この時、母に勧められて高山樗牛の評論を読み、ホイットマン論とその詩に感銘を受ける。翌年、原級に留年。

大正2年(1913) 6月、有島武郎の「ワルト・ホキットマンの一断面」(『文武会々報』掲載)を友人に紹介され、深く感動する。またこの頃、校内の絵画愛好会に参加する。

この冬、札幌の中学校で開催された弁論部大会に弁士として派遣され、イブセンの詩劇「ブランド」について論ずる。

6月、東北帝国大学農科大学(現・北海道大学)予科を受験。試験会場は東京大塚の高等師範学校で、有島武郎が英語の試験官であった。同年9月に入学(19歳)。英語の担当教授となった有島に傾倒し、しばしば札幌北12条の有島宅を訪れた。

11月、有島、妻の療養のため離札。三代治、同大学の『文部会会報』に〈朝千吉〉などの筆名で創作の発表を始める。

三代治、この頃、地元小樽に高田紅果・出口豊泰などの文学好きな友人が出来る。

9月、紅果ら、文芸雑誌『白夜』創刊。札幌の三代治も参加し〈朝千吉〉の筆名で寄稿。

10月、来道した有島武郎の講演を同大学の文武会クラブで聴く。

7月、夏休みの朝鮮・満州への農業見学旅行の帰路、有島を軽井沢に訪ねる。

10月、三代治、「ワルト・ホイットマンの抱愛」を『文武会会報』に発表。

大正7年

11月10日、白夜会、講演会に有島武郎を講師として招く。三代治は有島の案内役を務める。
1月、有島の講演に感動した白夜会同人、雑誌『已達(おれたち)』を創刊。
7月、三代治、東北帝国大学農科大学予科卒業(なお、この年より同大は北海道帝国大学となる)。
9月、北海道帝国大学農学部農学科第一部に入學(23歳)。

大正8年

10月、京都に行き、有島の同志社大学連続講演を聴講。
11月、京都からの帰途、東京麹町の有島邸を訪問。
2月、高田紅果・早川三代治・出口豊泰ら、文化団体(小樽啓明会)結成。
3月、啓明会第一回講演会開催。第一回目の講師は、小樽高等商業学校教授・大西猪之介。
三代治、この年からしばらく、「悪熱になやまされてゐるやうな創作慾」(早川三代治「危機」)を抑えて卒論に取り組む。この年、卒論の題目をクロポトキンの農業理論と決めて作成に取りかかる。有島にクロポトキンの批判的研究と欧州留学の志を伝え、激励を受ける。直接の指導教官は、北大の高岡熊雄教授。

大正9年

東大で(森戸筆禍事件)(無政府主義者クロポトキンの研究に対する取締り事件)が起こる。
三代治、大西猪之介の助言により、テーマを「収穫通減法則に就て」に変更。

大正10年

2月、卒論提出直後にヨーゼフ・シュンペーターの著書『理論経済学の本質と主要内容』を知り、論理の明晰さに衝撃を受ける(25歳)。
3月、北海道帝国大学卒業。
6月、経済学研究のためにドイツ留学に赴く。出発に先立ち、有島邸を訪問。武郎、三代治のためにスイス大使宛ビザ依頼状を書く(9日付)。結果的に、これが二人の最後の面談となる。
6月11日、三代治は出発直前の挨拶に再び有島邸を訪れるが、武郎に来客多く、面会できないまま夜11時過ぎに辞去する。
6月12日、東京駅出発。同月14日、日本郵船の静岡丸に乗り神戸港を出港。
8月2日、マルセイユ到着。9日、ドイツ・ボンに入着。
8月15日、高岡熊雄と大西猪之介の紹介状を携え、ボン大学のハインリッヒ・ディーツェル教授に会う。同教授の紹介で、ゲハイムラート・フーバーマン氏の家に下宿する。
9月中(下旬)、フランスのブルターニュ地方、パリ、ヴェルダン戦場跡等を巡る。
10月中(下旬)、鼻に異常を生じ入院・手術。
11月、ボン大学哲学科に入學(26歳)。ディーツェル、シュピートホフ、マンステッドの三教授に師事する。またこの頃、ケルン在住で県立愛知医科大学教授の酒井繁と知り合い、以後交流を深める。

大正11年

なお、留学期間を通じて『北海タイムス』紙に寄稿し、また、小樽の文学仲間の高田紅葉・本間勇児・出口豊泰、友人で岩内在住の漁夫画家・木田金次郎（有島『生れ出づる悩み』の主人公のモデル）らとの文通を続ける。

2月5日、下宿先の娘が急病で死去。葬儀に参列。

3月、大西家からの通知状で大西猪之介の死（2月8日、33歳没）を知り、『デイトツェル』教授に報せる。

6月6日、エッセンに行き、小樽高商のルイス・フーゴー・フランク先生の実家を訪ねる。フランク一家と早川家とは家族ぐるみの付き合いがあった。

8月6日～9月11日 夏休み旅行で北欧を廻る。ベルリンで酒井繁、中本実（金沢高等工業学校教授）らと旅程を定め、ハンブルグからデンマークのコペンハーゲンを経て、ノルウェーのクリスチャニア（現・オスロ）に入る。イプセンの墓に詣でた後、ノルウェーのフィヨルド地帯を旅行。

大正12年

1月、フランス・ベルギー連合軍、ドイツのルール地方に侵入し占領。ドイツが第一次大戦の賠償金を払いかねていたことに伴う一種の差し押さえる措置であったが、重要な工業地帯を占領されたドイツはさらに経済的に困窮し、通貨マルクの下落が一層深刻となる。

2月、三代治、次の夏学期をベルリン大で学ぶ事に決める。

3月、三代治、デイトツェル教授からベルリン大学

のシューマツハ教授宛紹介状をもらい、ベルリンに移る。この頃同地に入居していた北大の恩師・高岡熊雄を、挨拶のため訪問する。また同地で、有島武郎の教え子で昆虫学者の小熊樺と再会。

5月、ベルリン大学法文哲学科に入学（27歳）。経済学を専攻。

7月中～下旬頃、有島武郎の死（45歳没）の報を知る（時期は推定）。

9月2日、地元新聞で関東大震災の報を知る。

9月上旬と10月上旬に、下宿を相次いで転居（ハイパーインフレの影響で下宿の値上がり激しく、また下宿の対応も諸事不親切だったため、相当の不自由が生じていたと思われる。なお、マルク価値下がりの最大値は11月20日の公式レート1ドル＝4兆2千億マルク）。

11月15日、ドイツのレンテン銀行、レンテンマルクを發行（1レンテンマルク＝1兆マルク）。この後、ハイパーインフレは終息に向かう。

2月2日～5月29日まで小熊樺とイタリヤ旅行。

ローマを中心としてナポリやポンペイ、フィレンツェなどの各所の文化・宗教遺産を巡り、また写生に出歩く。

6月、ベルギーに戻る小熊樺と別れ、ウィーンに向かう。この月、尊敬する経済学者シュンペーターがウィーンのビードラーマン銀行で頭取となつてゐることを知り、手紙で面会を申し込む。

大正13年

6月23日、シュンペーターに会い、指導を仰ぐ。将来の研究方向について示唆を受ける。
10〜11月 ハンガリー方面に旅行し、ベネチア、ミラノを経てマルセイユに向かう。
11月20日、マルセイユを出港。アンドレ・ルボン号で帰国の途に就く。
大正14年
1月5日、神戸港到着。
4月より北海道帝国大学農学部講師（農業経済学教室勤務）となる（29歳）。

大正15年・昭和元年（1926） 4月、北大社会科学研究会関係者の検査があり、関与を疑われるが、誤解と判明する。

昭和2年
6月、小樽からの通勤をやめ、札幌市内に家を借りる。
島崎藤村に短編「青鶴（あおしぎ）」、戯曲「新しき繩」の初稿「吹雪の底」などを送り、知遇を得る。
札幌市北8条に転居。

昭和3年
7月 短編「青鶴」を『北大文藝』12号に発表。この後、昭和18年まで、同誌にほぼ毎月戯曲や短編を発表する。

この年、藤村の手を経て、「吹雪の底」が自由劇場主宰の小山内薫に、「聖女の肉體」が劇作家・批評家で『三田文学』主宰者の水上瀧太郎に紹介される。
12月 父・二代目両三死去（72歳没）。弟の昇が家

督を継ぐ。小山内薫、25日死去（47歳没）。
昭和4年
1月、戯曲「聖女の肉體」を『三田文学』に発表。

3月、「強い女」（「吹雪の底」改稿、「新しき繩」先駆形）を推敲し、藤村に送る。

昭和5年
5月、『純理経済学序論』を出版。日本で最も早い時期に数理経済学の重要性を説いた著作。

昭和6年
1月下旬、シュンペーター教授来日。東京で3回の講演を聴講したほか、2月に、京都大学・神戸商科大学での同教授講演・討論に加わる。エコノメトリック・ソサエティ（米国）発足に伴い会員となる。

2月、『レオン・ワルラス純粋経済学入門』刊行。
6月、島崎藤村推薦文「早川三代治を紹介す」のもとに短編「下生者（げしうじや）」を『サンデー毎日』に発表。

昭和7年
9月、『パレート数学的経済均衡理論』刊行。
10月、山木たけと結婚（36歳）。

昭和8年
4月、経済学財政学講座分担となる。
不況下の旭川での調査を端緒として、所得分布に関する実証的研究を始める。

6月、戯曲「新しき繩」を『劇と評論』（復活第2号）に発表。
8月、長男誕生。

昭和8年
11月、第一戯曲集「聖女の肉體」（明窓社）刊行。
12月、小樽の実家へ居を移す。

この年、パレート法則の検証を目的として、北海道全市町村に対し、個人所得データに係る独自のアン

ケート調査を開始する。

9月、道東根釧原野の虹別その他を巡る。過酷な開拓地の実態を見て、人間と土地との格闘の歴史を長編として著す構想を得る。これが後にライフワーク〈土と人〉シリーズとなる。

10月、随筆集『ラインのほどり』（明窓社）刊行。
12月、短編集『青鷗』（明窓社）刊行。

昭和9年
同月29日〜31日、「新しき繩」、新劇座第9回公演として帝国ホテル演芸場にて上演。主演・花柳章太郎。
4月、北大助教教授となり、経済学財政学講座を担任（38歳）。

6月、長編『鶴の生息地』（のちに〈土と人〉シリーズ第2部「処女地」を『北大文藝』に連載開始。
7月、長編『ル・シラアジユ（船あと）』（明窓社）刊行。

昭和10年
4月、次男誕生。

昭和11年
秋以降、弟と母が順次入院加療を要するようになる。
3月、北大を辞職。家業を継ぎ、民有未墾地問題、農林鉱業開発問題処理などに携わるが、その傍ら、学会活動及び創作も継続（40歳）。

昭和12年
5月、詩集『エムブリオ（胚珠）』（丸善札幌）刊行。
10月、第二戯曲集『トレグララチェ（丸善札幌）』刊行。
1月、母・志満死去（71歳没）。4月、第三戯曲集『マダムレア』（丸善札幌）刊行。同月、『北大文藝』

34号（早川三代治氏記念号）発行。
6月22日、4月の『北大文藝』に応えて、「答えざる答」

を『北大新聞』に発表。これより数ヶ年、作品の対外発表から遠ざかる。

昭和13年
11月、三男誕生。
この年から戦後まで、『若い地主』の原型「ボン神恵の地主」を書き継ぐ。

昭和14年
4月、島崎藤村を訪問し、中島健蔵を紹介される。
8月末、根室・中標津・根室標津・標茶・弟子屈・塘路湖・釧路・温根内・春採炭鉱を取材。

昭和15年
6月、蔵書を置いていた札幌のアパートを引き上げ、また旧有島宅の庭からライラックの苗木を自家に移植する。
10月、四男誕生。

昭和16年
3月、日本ペンクラブ出席。藤村、中島健蔵らと懇談。

昭和17年
10月、北大で講演。題は「人及び芸術家としての有島武郎」。
12月、太平洋戦争始まる。

昭和18年
11月〈土と人〉第二部『処女地』（元元書房）刊行。
出版記念会の後、島崎藤村を訪問。

昭和19年
8月、島崎藤村死去（71歳没）。
12月、大磯・地福寺の藤村の墓に詣でる。
1月、〈土と人〉第三部『土から生れるもの』（元元書房）刊行。

8月、〈土と人〉第四部『生ける地』（宝文館（元元書房））刊行。

昭和20年 (1945) 2月、〈土と人〉第一部『根』(宝文館)刊行。

8月15日、終戦。玉音放送を緑小学校職員室で聴く。またその翌日、小学校職員を励ますために職員室で講話し、藤村直筆の掛軸と自身の詩集『エムプリオ』を贈る(50歳)。

昭和21年 11月、〈土と人〉に、第五部「地飢ゆ」(満州事変から敗戦まで)を追加することを決める。

このころ、昭和20年春から終戦までの小樽の様子を小説「敗戦前後」として描く(未発表)。

昭和22年 10月、北大恵迪寮にて「島崎藤村と有島武郎」を講演。
7月、長編小説『若い地主』(青年論壇社)刊行。

昭和23年 8月、「地飢ゆ」成稿。
1月、「クリスチアニア峡湾(フィヨール)」を『青年論壇』に発表。

4月、小樽経済専門学校教授となる(52歳)。併せて、1年間の北大農学部講師を応諾。同月、米国のシュンペーター教授に、「所得分配の測定」(The Measurement of the Distribution of Income)と題する、北海道所得状況調査に対するパレート法則適用の英語論文を送付。これは、戦争によって門戸が閉ざされていたエコノメトリック・ソサイエティが復活したため。

昭和24年 7月、新制大学昇格に伴い、小樽商科大学教授となる(53歳)。経済原論・経済学史担当。また同月、来演中の新生新派一座の花柳章太郎らと会い、「新

しき纏」再上演の希望を聞く。
昭和25年 1月、シュンペーター死去(66歳没)。

8月、イギリスの詩人エドマンド・ブランデンに詩集『エムプリオ』英訳原稿を送る。

11月、ブランデンより懇切な批評私信を受け取る。
12月、〈土と人〉第六部「葉(ひこばえ)」の構想を得る。

昭和26年 1月、日本学術会議会員となる(2期6年)。

4月、米国『エコノメトリカ』誌に、英語論文「パレート所得法則の日本データへの適用」(The Application of Pareto's Law of Income to Japanese Data)が掲載される(「所得分配の測定」改稿)。日本人初の快挙(55歳)。

昭和27年 5月、三代治の尽力により、北海道経済学会創設。
7月、小樽商大で設立総会開かれる。

昭和30年 11月、新生新派一座による「新しき纏」が放送(大阪朝日開局一周年記念)される。
4月、啄木44回忌に際しての高田紅果の講演を聴く。

昭和31年 8月、長年交際していた高田紅果、急逝(64歳没)。
4月、早稲田大学の久保田明光教授と懇談。東京へ出ることを考え始める。

7月、日本統計学会第24回大会を小樽で受入れ開催し、成功裡に終える。

昭和32年 3月末、小樽商科大学を辞する。

4月、早稲田大学教授に就任(61歳)。以後、長期休暇には小樽に戻る生活となる。

昭和33年

夏休み中、二度にわたって道東の標茶・虹別に取材旅行し、「蘗」の資料を整理する。
この頃から、有島武郎を題材とした長編小説「或る地主」（地主の家）、「父と子」等も表題候補の構想の具体化を企図する。

8月1日、四男・佳郎と共に、前年5月に焼失したニセコの有島農場解放記念館跡地を訪れる。翌日、かつての有島農場事務所の間取り等を木田金次郎に書簡で問い合わせる。木田は同月11日に返信。

昭和34年

2月14日、「新しき繩」がラジオドラマとしてラジオ東京へ空中劇場にてオンエアされる。全国放送。主演・花柳章太郎。

昭和35年

1月、経済学博士の学位を受ける（64歳）。
12月、木戸清平による早川三代治研究書『知られざる文学』（川又書店）刊行。

昭和36年

7月、標茶・虹別を巡る。夏休み中へ土と人再読とプロットメモ作成。第五部「地飢ゆ」と第六部「蘗」の構成につき検討。

昭和37年

9月末より、第一部「根」の再推敲に入る。
（1962）5月、『根』に引き続き第二部『処女地』再推敲に入る。同月「有島武郎四十周年記念会」（丸の内・東京会館）に参加。

6月末、「有島先生関係者の集い」（於・新宿）に参加。
7月、小樽に戻り、へ土と人資料整理と第五部「地飢ゆ」再推敲に入る。
8月、講談社『有島武郎集』月報のための原稿「有

島先生」を執筆。

同月21日、「地飢ゆ」の再推敲、2〜3ヶ所を除き完了。

同月22日朝、脑梗塞を発症し、市立小樽病院に入院。
28日、死去。67歳。

参照 「早川三代治年譜 早川治男・佳郎編

『地飢ゆ』（中央公論事業出版 平成24年）所収

早川三代治展 展示資料リスト

〈少年時代〉

稲垣益穂日記 第14巻 明治41年4月12日の記述

小学校時代の習字 2枚(日付 11月17日、12月16日)

通信箋 明治38・39・40年 稲穂小学校高等科第1〜3学年

綴方帳 明治38年第4月

稲穂尋常高等小学校修業証書 明治41年3月24日

稲穂尋常高等小学校校章 明治41年3月24日

写真 早川商店(入舟町)

写真 早川家の人々(祖母志ん、三代治、祖父西三、父高村岩三郎、母志満)

模写 早川三代治による写真の模写 中学校時代

写真 序立小樽中学4年生時の写真 明治44年8月25日

前列左・早川三代治 前列中央(左から2人目)・河崎久助

写真 北大予科1年の頃

〈有島武郎との出会い／ドイツ留学時代／ドイツ演劇からの影響〉

ワルト・ホイットマン『草の葉』(マツケイ版) 1900年

同人誌『巳達(おれたち)』1〜3号 大正7年1〜4月

有島武郎画 榎井沢の朝雲 大正6年

早川三代治『ボン便り』『群像』大正12年6月

八木真吾(早川三代治)『ラインの人々』(一)〜(三)

『新樹』大正15年1〜5月

早川三代治『喪の休戦記念日』『教育建設』昭和22年9月

早川三代治『愛情』『サンデータイムス』昭和24年1月

早川三代治『ラインのほとり』明窓社 昭和8年10月

三代治のドイツ土産 マッチ箱ミニチュア 1個

クノッホオペラガイド 1冊

ドイツの劇場パンフレット 3冊

女優フリードル・ミュンツァーの写真絵葉書 5枚

早川三代治『聖女の肉體』明窓社 昭和7年11月(第一戯曲集)
『聖女の肉體』跋文章稿(同書に収録せず)

(早川文庫蔵書 戯曲洋書)

※タイトルには、日本語の定訳のほか、展示
担当者が便宜上日本語訳したものも含まれる。

- フランク・ヴェーデキント『シムソン』 1920年
- フランク・ヴェーデキント『フランチスカ』 1921年
- ヘルマン・バール『ダンス』 1911年
- ゲオルグ・カイザー『オペラ座の火災』 1922年
- ゲオルグ・カイザー『女性の被害者』 1922年
- ゲオルグ・カイザー『共存』 1923年
- ゲオルグ・カイザー『シルとジャンヌ』 1923年
- フリッツ・フォン・ウンルー『嵐』 1922年
- ボダンツキー／ハルト＝ウォーデン『幸福へのダンス』
- ホフマンスタール『救われたベニス』 1905年
- ホフマンスタール『エレクトラ』 1908年
- ホフマンスタール『ばらの騎士』 1911年
- ホフマンスタール『イエーダーマン』 1927年
- ホフマンスタール『塔』 1927年
- シュテファン・ゲオルグ『生の絨毯』(詩集)
- ルドルフ・フランク『コロロジン夫人』
- エミール・ファクター『アレクサンダー・モイッシ』(研究書)
- シュテファン・ツヴァイク『変身したコメディアン』 1923年
- フランツ・モルナール『オオカミのメルヘン』 1912年
- フランツ・モルナール『ガードナール』 1922年
- ベアトリス・ドヴスキー『モナリザ』
- ゲーテ『ミニオン』 1868年
- オコノウスキ／ブロンメ『マスコットちゃん』 1921年
- ルートヴィヒ・ガイヤー『幼児虐殺』

フリードリヒ・ヘッベル『ヘロディアスとマリアンネ』 1850年
ウィルヘルム・シュミットリボン『町の子』 1904年

『田舎騎士道』作曲：ピエトロ・マスカーニ

『タンホイザー』作曲：リヒャルト・ワーグナー
シヤンツァー／ウエルシュ『ボンパドール夫人』

ギズランツォーニ『アイーダ』

『ホフマン物語』作曲：ジャック・オッフエンバック

『ライプツィヒ劇場年鑑』 1926年

〈島崎藤村との縁と戯曲創作〉

『強い女(吹雪の底)』(「新しき繩」 祖稿、舞台画メモ在中)

早川三代治画 戯曲「吹雪の底」舞台

ボン大学絵集書 大正10年(1921) 8月

早川三代治所持 1. Bakst の衣装画

早川三代治所持 Cecilia Sorel の肖像写真(サイン入り)

早川三代治「下生者(げしようにゃ)」と島崎藤村の紹介文

『サンデー毎日』昭和6年5月6日号

早川三代治「新しき繩」『劇と評論』昭和7年6月

「新しき繩」写真5枚・雑誌切抜き1枚

「新しき繩」チラシ・パンフレット

「新しき繩」劇評切抜き 3枚

花柳章太郎 早川三代治宛書簡 昭和9年1月24日

長谷川伸 早川三代治宛書簡 昭和8年12月29日

山田武彦 早川三代治宛書簡 昭和8年12月31日

ラジオ東京〈空中劇場〉「新しき繩」台本

ラジオドラマ「新しき繩」放送当日の番組表 昭和34年2月14日(土)

木田金次郎 早川三代治宛書簡 昭和34年2月16日

「幻の脚本「新しき繩」を求めろ」『週刊新潮』昭和56年12月24日号

早川三代治「トレ・グラチエ」丸善札幌 昭和11年10月(第二戯曲集)

早川三代治『マダム・レア』丸善札幌 昭和12年4月(第三戯曲集)

写真 北大教官時代 札幌自宅か

写真 北大教官時代 北大研究室か

早川三代治画 戯曲「聖女の肉體」舞台(画材不詳)

早川三代治画 戯曲「聖女の肉體」舞台 水彩

写真 舞台「新しき繩」左・藤村秀夫 右・花柳章太郎

写真「新しき繩」舞台全景

写真 北海道帝国大学教授の頃 北大文芸部短歌会

〈郷土作家 早川三代治〉

早川三代治『青鶴(あおしぎ)』明窓社 昭和8年12月

早川三代治「若い地主」青年論壇社 昭和22年7月

早川三代治「養ひの土地」『週刊朝日』北海道版 昭和21年10月13日

洋書『ヴェルダンとその占領のための戦い』

イナストレイテッド・ミシラン・ガイド戦場篇 1919年

早川三代治「敗戦前後」草稿 昭和22〜23年頃

大正8年頃のキロ周辺地図

写真 小樽商科大学短期大学の講義 昭和30年12月

写真 東京出張 定宿の前

写真 早稲田大学 教育学部ゼミ送別会 昭和33年2月

〈晩年の挑戦——有島を主題とした小説の構想〉

有島農場取材メモ・地図・絵など 昭和33年8月1日

有島武郎より贈られた有島写真

木田金次郎 早川三代治宛書簡 昭和33年8月11日

「或る地主」のためのメモ・切抜き類

「或る地主」構想メモ・手控え

「或る地主」取材のために用意していた地図(狩太・岩内・倶知安・留寿都)

有島武郎から贈られたホイットマン肖像

写真「或る地主」のための有島農場取材 昭和33年8月1日

写真 故有島武郎四十周年記念会 丸の内東京会館 昭和37年6月9日

写真 故有島武郎四十周年記念会にて 昭和37年6月9日

〈早川三代治作品発表誌〉

『北大文藝』昭和2〜18年
巻号…11、12、13、14、15、16、17、18、20、21、22、24、27、28、29、
31、32、33、40、41、42、43、44
『三田文学』昭和4〜9年
巻号…4-1、4-3、4-11、5-10、6-7、7-9-1

〈早川三代治の舞台画〉

戯曲「白い塔」舞台装置画 1枚
戯曲「白い塔」舞台画 水彩 8枚
戯曲「ペネチア風の仮面」舞台画 水彩 1枚
戯曲「死人の土地」舞台画 水彩 1枚
戯曲「鉄(やっこ)」舞台画 水彩 2枚
洋書 ユリウス・パール『現代演劇』1928年
洋書 アンドレ・ポール『劇場裝飾』
洋書 アレクサンダー・タイロフ『解放された演劇』

〈三代治と絵画〉

(クレヨン画)
無題 風景 昭和20年(1945) 10月31日 2枚
無題 風景 昭和20年(1945) 11月20日
無題 風景 昭和21年(1946) 6月28日
秋果図
無題 あじさい
無題 花
無題 芥子
無題 牡丹

〈イタリア スケッチ旅行〉

スケッチ帖 ローマ・ナポリの風景 大正13年(1924)
早川三代治滞欧スケッチ帖より 複製2枚

早川三代治 油彩画スケッチ板 滞欧中制作 9枚

写真 左・小熊捍 右・早川三代治
写真 ローマ近郊の写生旅行

左・早川三代治 中・小熊捍 右・八木沢文吾
写真 ドイツから帰国途上の船上 大正13年12月〜翌年1月

三代治が愛用した絵具箱とイーゼル
愛用のコウモリ傘
愛用の中折帽とスプリングコート

〈北欧旅行〉

写真 クリスチャニア王宮 1922年(大正11) 8月18日
写真 クリスチャニア イブセンの墓畔にて 8月18日
写真 クリスチャニア近郊スキー場レストラン 8月18日

左から酒井・早川・中本

写真 シーンからダーレンへの運河 8月21日

写真 ダーレン湖畔 8月21〜22日

写真 オッタ村の教会 8月22日

写真 オッタ近く ロートホス(ラテフォッセン)

滝見の三代治 8月23日

写真 スタールハイムからクドバンゲンへの谷間 8月26日

写真 クドバンゲンで船を待つ 8月26日 左から早川・中本・酒井

写真 クドバンゲンにて フィヨール通りの船 8月26日

写真 バルホルム クビクネホテルにて 8月26〜27日

左から中本・早川・酒井

写真 ストックホルム市にて 8月31日〜9月1日

滞欧期トランク 2点

書類カバン 1点

ペンケース・万年筆・ペーパーナイフ

早川三代治「フィヨールの旅」清書原稿 昭和9年10月

早川三代治「クリスチアニア峡湾」『青年論壇』昭和33年1月

小樽商科大学附属図書館「早川三代治展」について

小樽商科大学附属図書館では、平成28年5月21日から7月24日まで、市立小樽文学館との共催で早川三代治展を開催した。

早川三代治は、小樽に生まれ育ち、経済学者としても高い業績を上げながらも、多くの文学作品を残した異色の人物である。早川と本学との関係は、昭和23年4月に小樽経済専門学校教授、翌年7月新制大学昇格に伴い小樽商科大学教授となり、その間、附属図書館長を務められ、昭和32年4月まで本学に在籍されていたという経緯がある。また、亡くなられた後も、遺族から早川の蔵書が当館に寄贈され、当館の特色あるコレクションの一つとなっている。



今回の展示では、市立小樽文学館で「インターナショナルな知的表現者」と題し、文学・演劇の側面や有島武郎との関係に注目した展示が行われたのに対して、当館では「格差問題研究の先駆者」と題し、経済学の側面、特にドイツ留学時のハイパーインフレ、シュンペーターとの邂逅、北海道の個人所得調査、エコノメトリカ誌への論文発表に注目して、パネルと資料による展示を行った。

なお、展示パネルのデータについては、本学学術成果コレクション (Baral) で入手することができる。

○展示パネル一覧

- ・ 展示概説
- ・ 出生から大学卒業まで (明治28年～大正10年)
- ・ ドイツ留学とハイパーインフレ (大正10年～14年)
- ・ シュンペーターとの邂逅 (大正13年)
- ・ 帰国以後 (大正14年～昭和37年)
- ・ 道内の個人所得調査
- ・ Econometrica への論文発表 (昭和26年)
- ・ 世界に通用する経済学者早川三代治
- ・ 早川三代治の文芸活動
- ・ 早川文庫について
- ・ 早川三代治略譜

○展示資料

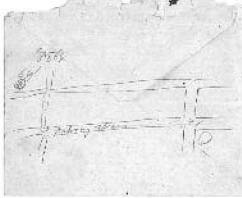
・ハイパーインフレ時のドイツ紙幣

100×100万マルク紙幣、10×100万マルク紙幣



・シュンペーターのメモ

大正13年、ウィーンのビーターマン銀行の頭取であったシュンペーターに面会を申し込んだ際の返信の封筒。面会日時が書かれていた名刺が入っていたとされ、封筒の表書きはシュンペーター直筆、裏には面会場所の地図の記載あり。



・道内の個人所得調査資料
早川三代治が独自に道内の個人所得を調査し、市町村別に集計したもの。

市町村	所得額	人口	所得額	人口	所得額	人口
札幌市	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
東京市	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000
大阪市	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000
名古屋市	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000
京都市	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000
神戸市	900,000	80,000	900,000	80,000	900,000	80,000
広島市	700,000	60,000	700,000	60,000	700,000	60,000
福岡市	600,000	50,000	600,000	50,000	600,000	50,000
北九州	500,000	40,000	500,000	40,000	500,000	40,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
青森市	300,000	20,000	300,000	20,000	300,000	20,000
岩手県	200,000	15,000	200,000	15,000	200,000	15,000
宮城県	150,000	10,000	150,000	10,000	150,000	10,000
秋田県	100,000	7,000	100,000	7,000	100,000	7,000
山形県	80,000	6,000	80,000	6,000	80,000	6,000
福島県	70,000	5,000	70,000	5,000	70,000	5,000
茨城県	60,000	4,000	60,000	4,000	60,000	4,000
栃木県	50,000	3,000	50,000	3,000	50,000	3,000
群馬県	40,000	2,000	40,000	2,000	40,000	2,000
埼玉県	30,000	1,500	30,000	1,500	30,000	1,500
千葉県	20,000	1,000	20,000	1,000	20,000	1,000
東京都	10,000	500	10,000	500	10,000	500
合計	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000

市町村	所得額	人口	所得額	人口	所得額	人口
札幌市	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
東京市	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000
大阪市	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000
名古屋市	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000
京都市	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000
神戸市	900,000	80,000	900,000	80,000	900,000	80,000
広島市	700,000	60,000	700,000	60,000	700,000	60,000
福岡市	600,000	50,000	600,000	50,000	600,000	50,000
北九州	500,000	40,000	500,000	40,000	500,000	40,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
青森市	300,000	20,000	300,000	20,000	300,000	20,000
岩手県	200,000	15,000	200,000	15,000	200,000	15,000
宮城県	150,000	10,000	150,000	10,000	150,000	10,000
秋田県	100,000	7,000	100,000	7,000	100,000	7,000
山形県	80,000	6,000	80,000	6,000	80,000	6,000
福島県	70,000	5,000	70,000	5,000	70,000	5,000
茨城県	60,000	4,000	60,000	4,000	60,000	4,000
栃木県	50,000	3,000	50,000	3,000	50,000	3,000
群馬県	40,000	2,000	40,000	2,000	40,000	2,000
埼玉県	30,000	1,500	30,000	1,500	30,000	1,500
千葉県	20,000	1,000	20,000	1,000	20,000	1,000
東京都	10,000	500	10,000	500	10,000	500
合計	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000

昭和十三年 道内市町村別個人所得調査資料

市町村	所得額	人口	所得額	人口	所得額	人口
札幌市	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000	1,200,000	100,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
東京市	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000	2,500,000	200,000
大阪市	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000	2,000,000	180,000
名古屋市	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000	1,500,000	130,000
京都市	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000	1,000,000	90,000
神戸市	900,000	80,000	900,000	80,000	900,000	80,000
広島市	700,000	60,000	700,000	60,000	700,000	60,000
福岡市	600,000	50,000	600,000	50,000	600,000	50,000
北九州	500,000	40,000	500,000	40,000	500,000	40,000
仙台市	800,000	70,000	800,000	70,000	800,000	70,000
青森市	300,000	20,000	300,000	20,000	300,000	20,000
岩手県	200,000	15,000	200,000	15,000	200,000	15,000
宮城県	150,000	10,000	150,000	10,000	150,000	10,000
秋田県	100,000	7,000	100,000	7,000	100,000	7,000
山形県	80,000	6,000	80,000	6,000	80,000	6,000
福島県	70,000	5,000	70,000	5,000	70,000	5,000
茨城県	60,000	4,000	60,000	4,000	60,000	4,000
栃木県	50,000	3,000	50,000	3,000	50,000	3,000
群馬県	40,000	2,000	40,000	2,000	40,000	2,000
埼玉県	30,000	1,500	30,000	1,500	30,000	1,500
千葉県	20,000	1,000	20,000	1,000	20,000	1,000
東京都	10,000	500	10,000	500	10,000	500
合計	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000	10,000,000	800,000

昭和十三年 道内市町村別個人所得調査資料

・Econometrica 誌掲載論文抜刷
 国際的な経済学の学術雑誌である Econometrica 誌に、日本人として初めて掲載された論文抜刷。

THE APPLICATION OF PARETO'S LAW OF INCOME TO JAPANESE DATA*

By MITSUO HAYAKAWA

It is commonly accepted that Pareto's law holds well for the middle range of income distribution but not for smaller and for the larger classes. Although it is comparatively easy to analyze the larger income stratum, the econometric approach is essential for analyzing the distribution of smaller incomes. Data are presented for income distribution in 1911 of the 274 communes (full-time, towns, and cities) in Hokkaido, Japan, including data for the smaller incomes below the tax limit. Using these data and Pareto's curve, the author attempts to estimate income distribution as a whole in Japan. The extreme positive skewness of the income distribution is noted, and appropriate methods of curve fitting are explained.

PARETO'S LAW OF INCOME

VILFREDO PARETO's law of the distribution of income states, in its most dignified form, that the distribution of incomes in the upper range¹ of income follows approximately the equation

$$N = AX^{-\alpha}$$

where X is income size, N is the number of individuals having that income or more, and A and α are constants to be found from empirical statistics. The double-logarithmic graph of this curve will be a straight line of slope $-\alpha$ since the above equation may be written

$$\log N = \log A - \alpha \log X.$$

α, "Pareto's constant," has shown a remarkable stability, for sufficiently high income levels, around the value 1.6, not only for Pareto's data, which extend from 1871 to 1894 and in geographical distribution from Peru in the eighteenth century to countries of Europe, but also for more recent data.²

Pareto recognized some inadequacies of his equation. In the first place, the formula $N = AX^{-\alpha}$ represented only a simplification of the more general equation

$$\log N = \log A - \alpha \log (a + X) - \beta X.$$

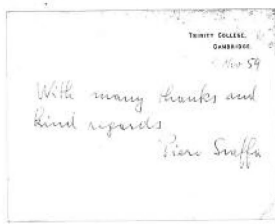
A to be determined for each region and time from empirical statistics.

*The author wishes to thank Dr. Etsuro W. Hatanaka of Hokkaido University for assistance in typing an earlier version of this paper and for the provision of income data mentioned in the final paragraph.

¹By upper range we mean incomes above the middle.

²For, for example, H. O. Johnson, "The Pareto Law," Review of Economic Statistics, Vol. 3, February, 1921, pp. 20-26.

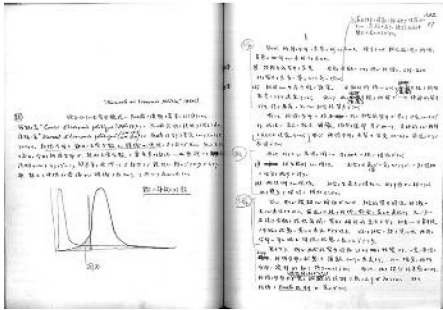
・ピエロ・スラツプファーからの手紙
 ケインズ後継者の一人とされるイタリア出身の経済学者ピエロ・スラツプファーからの手紙。



・訳書の自筆原稿『パレートの経済的均衡の一般方程式』



・講義ノート（分配理論）



○展示図書等一覧 〈早川三代治著作・訳書〉

- 早川三代治『純理經濟學序論』1930年
Miyoji Hayakawa (1930). Julius Kautz und das Gossensche Gesetz
早川三代治譯述『レオン・ワルラス純粋經濟學入門』1931年
早川三代治『數學的經濟均衡理論』1931年
早川三代治『動的均衡及び動態に関するパレートの基礎方程式』
1932年
早川三代治「我邦耕地の分配状態に就て」(『高岡熊雄先生在職三十五年記念論文集』別刷) 1932年
早川三代治「Cournotの國際貿易理論に對する Paretoの批評」
(『法經會論叢』抜刷) 1934年
早川三代治「旭川市に於ける所得分布」(『法經會論叢』抜刷)
1934年
『小樽商科大学開學記念論文集』1949年(第2分冊に早川三代治「財産分布に関する一考察」を収録)
Miyoji Hayakawa (1951). The application of Pareto's law of income to Japanese data
早川三代治「RARETE概念の發展」(『久保田明光教授還曆記念論文集』抜刷) 1957年
Miyoji Hayakawa (1959). Essays on the distribution of income
早川三代治譯「國民經濟學に對する數學の応用」(草稿)
早川三代治「北海道における高物價とその諸原因に関する研究」(草稿)

〈関係図書〉

- Joseph Schumpeter (1908). Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie
Joseph Schumpeter (1926). Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung : eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus
小樽商科大学附属図書館編『早川文庫目録：故早川三代治教授旧蔵人文・社会科学文庫』1976年
上久保敏『日本の經濟學を築いた五十人：ノン・マルクス經濟學者の足跡』2003年
金城ふみ子「經濟學者早川三代治の長編小説〈土と人〉の執筆意図・構成、出版の経緯：作品分析の背景考察の試み」(『東京國際大學論叢 經濟学部編』別刷) 2014年
金城ふみ子「經濟學者早川三代治の自伝的小説『若い地主』・「農地解放」に見られる悩みと打算：札幌農學校につながる二人の文人：師有島武郎と弟子の早川三代治」(『有島武郎研究』別刷) 2016年
金城ふみ子「經濟學者・早川三代治が小説『処女地』で描いた北海道虹別開墾村民の生活：世界大恐慌の始まった凶作続きの村の「敗者」の物語」(『東京國際大學論叢 人文・社会科学研究』別刷) 2016年

○江頭進氏講演

「経済学者としての早川三代治—格差論の先駆者—」

- ・早川三代治の卒業論文
- ・ヨーロッパ留学
- ・Econometrica論文—なぜ早川の研究が重要なのか？—
- ・日本近代経済学発展史の中の位置付け



早川三代治展

——インターナショナルな知的表現者——

平成28年12月

編集 市立小樽文学館

協力 小樽商科大学附属図書館

小樽文学舎

発行 市立小樽文学館

〒047-0031

小樽市色内1丁目9-5

電話 0134-32-2388

